

幾野々原遺跡

福岡県八女郡立花町大字北山所在遺跡の調査

立花町文化財調査報告書

第12集



2007

立花町教育委員会

き の の はる
幾野々原遺跡

福岡県八女郡立花町大字北山所在遺跡の調査

立花町文化財調査報告書

第12集

立花町教育委員会



調査区全景



1号壺棺



1号壺棺下壺の調整と彩色



Ⅲ区遺構より出土の銅鏡片



1号土坑出土の瀬戸焼

序

本書は、平成17年度の県営中山間地域総合整備事業農道工事に伴い発見された幾野々原遺跡の発掘調査報告書です。

幾野々原遺跡は、矢部川と辺春川が合流する付近から南西に750mのところにあります。ここからは弥生時代の集落跡や中世の土壌といった複合する時代の遺構・遺物が検出されました。さらに、立花町においては非常に珍しい鏡の一部も検出され、大変貴重な資料を得ることができました。

これをもとに、本町の埋蔵文化財に対して一層の関心が深まり、文化財の保護・活用、また今後の研究資料の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この調査にあたりまして福岡県教育委員会をはじめ、作業に携わっていただいた方々とその他多くの皆様のご指導、ご協力に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成19年3月31日

立花町教育委員会
教育長 西島民生

例 言

1. 本書は平成17年度に調査を実施した、福岡県筑後農林事務所が事業主体の県営中山間地域総合整備事業農道工事により破壊される福岡県八女郡立花町大字北山所在の幾野々原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は立花町教育委員会が主体となり福岡県教育委員会の協力を受けて実施した。
3. 遺構の実測は、岸本圭、末継彬子、月足まつみ、末吉理恵、野田早百合が中心に行った。遺構の写真撮影は、川島幹夫、末継が行い、空中写真撮影及びデジタル合成は株式会社九州航空に委託した。
4. 遺物の実測は末継、末吉、野上尚子が行い、写真は川島、末継が当たった。また、遺物写真撮影の一部を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 出土遺物・写真・実測図は全て立花町教育委員会に保管している。
6. 本書で用いる遺構図の方位は全て国土座標Ⅱ系による座標北である。
7. 本書の編集は末継が行った。

本文目次

I	はじめに	1
II	遺跡の位置と環境	2
III	発掘調査の記録	6
	(1) 遺跡の概要	6
	(2) 弥生時代	6
	1 住居跡	6
	2 甕棺	16
	3 その他	17
	(3) 中世	19
	1 土壙	19
	2 その他	27
	(4) その他	28
	1 I区ピット等	28
	2 II区ピット等	35
	3 III区ピット等	39
	4 包含層等出土遺物	48
IV	自然科学的考察	52
V	まとめ	55

挿図目次

第1図	立花町位置図	2
第2図	幾野々原遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図	幾野々原遺跡周辺遺跡分布図 (1/10,000)	4
第4図	調査区周辺地形図 (1/800)	5
第5図	1号竪穴住居跡実測図 (1/50)	7
第6図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/3)	9
第7図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図② (1/3)	10
第8図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図③ (1/4)	11
第9図	2号竪穴住居跡実測図 (1/50)	12
第10図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)	13
第11図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	14
第12図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	15
第13図	掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)	16
第14図	1号甕棺実測図 (1/20)	17
第15図	1号甕棺実測図 (1/6)	18
第16図	1号土壌実測図 (1/30)	19
第17図	1号土壌出土遺物実測図 (1/3)	20
第18図	2号土壌実測図 (1/30)	20
第19図	3号土壌実測図 (1/30)	21
第20図	3号土壌出土遺物実測図 (1/3)	21
第21図	4号土壌実測図 (1/30)	22
第22図	4号土壌出土遺物実測図① (1/3)	23
第23図	4号土壌出土遺物実測図② (1/1)	24
第24図	4号土壌出土遺物実測図③ (1/1)	25
第25図	5号土壌実測図 (1/30)	26
第26図	5号土壌出土遺物実測図① (1/3)	27
第27図	5号土壌出土遺物実測図② (1/1)	28
第28図	I区ピット等出土遺物実測図① (1/3)	29
第29図	I区ピット等出土遺物実測図② (1/3)	30
第30図	I区ピット等出土遺物実測図③ (1/1)	32
第31図	I区ピット等出土遺物実測図④ (1/1)	33
第32図	I区ピット等出土遺物実測図⑤ (1/1)	34
第33図	II区ピット等出土遺物実測図① (1/3)	36
第34図	II区ピット等出土遺物実測図② (1/3)	37
第35図	II区ピット等出土遺物実測図③ (1/1)	38
第36図	II区ピット等出土遺物実測図④ (1/1)	39
第37図	II区ピット等出土遺物実測図⑤ (1/1)	40
第38図	III区ピット等出土遺物実測図① (1/3)	42

第39図	Ⅲ区ビット等出土遺物実測図② (1/3)	44
第40図	Ⅲ区ビット等出土遺物実測図③ (1/1)	46
第41図	Ⅲ区ビット等出土遺物実測図④ (1/1)	47
第42図	包含層等出土遺物実測図① (1/3)	48
第43図	包含層等出土遺物実測図② (1/1)	49

付図	I 区遺構配置図 (1/1,000)
	II 区遺構配置図 (1/1,000)
	III 区遺構配置図 (1/1,000)

写真図版目次

写真 1	調査区 I 区・II 区	57
写真 2	調査区 III 区	58
写真 3	1号竪穴住居跡・遺物出土状況・2号竪穴住居跡	59
写真 4	2号掘立柱建物・1号甕棺・1号土壙集石	60
写真 5	1号土壙・2号土壙集石・2号土壙	61
写真 6	3号土壙・4号土壙・5号土壙	62
写真 7	銅鏡出土遺構・Ⅲ区東端	63
写真 8	1号甕棺	64
写真 9	1号竪穴住居跡出土遺物①	65
写真10	1号竪穴住居跡出土遺物②	66
写真11	2号竪穴住居跡・掘立柱建物・1号土壙・3号土壙出土遺物	67
写真12	4号土壙出土遺物	68
写真13	5号土壙出土遺物	69
写真14	I 区ビット等出土遺物①	70
写真15	I 区ビット等出土遺物②	71
写真16	II 区ビット等出土遺物①	72
写真17	II 区ビット等出土遺物②	73
写真18	III 区ビット等出土遺物①	74
写真19	III 区ビット等出土遺物②	75
写真20	III 区ビット等出土遺物③	76
写真21	III 区ビット等出土遺物④・包含層出土遺物	77

表目次

第1表	土錘観察表①	50
第2表	土錘観察表②	51
第3表	黒曜石・サヌカイト観察表	51
第4表	鉄製品観察表	51

I はじめに

今回報告する幾野々原遺跡は、白木川と矢部川が合流するところから南西へ延びる小高い丘陵上にある。1980年刊行の福岡県文化財分布地図には掲載されていない。平成18年度より始まる県営中山間地域総合整備事業北山地区にかかる農道の拡幅及び新設に先行する発掘調査で発見された遺跡である。平成17年6月23日に行った試掘調査では、農道東寄りの拡幅部分に3本のトレンチを入れたが、遺物をほとんど含まず50cmで地山に到達したため、遺構は確認されないと判断した。農道西寄りの新設部分においては、調査区名でいうⅠ区とⅢ区に1本ずつトレンチを入れた。Ⅰ区のトレンチは80cm下げたところに遺構面を検出し、溝か住居跡を横断するトレンチであった。Ⅲ区のトレンチは50cm下げたトレンチの中心あたりに遺構が検出された。土器が集中しており、焼土を含んでいた。試掘調査の結果、発掘調査が必要であることを福岡県筑後農林事務所、福岡県文化財保護課、立花町農政課、町教育委員会で確認し、平成17年7月21日より調査を開始することとなった。発掘調査及び遺構実測等は平成18年1月初旬まで実施し、整理作業は平成18年度に行った。

調査期間：平成17年7月21日～平成18年1月5日

調査面積：約1,600㎡

調査の組織

立花町教育委員会

平成17年度

総括

教育長 井上知巳

社会教育課

課長 中尾信幸

係長 川島幹夫

主任主事 末継彬子

平成18年度

総括

教育長 西島民生

教育委員会事務局

教育次長 中尾信幸

係長 川島幹夫

主任主事 末継彬子

福岡県教育委員会

文化財保護課

係長 小池史哲

(調査第一係)

主任技師 岸本 圭

発掘調査及び整理作業に従事していただいた方々（五十音順敬称略）

浅野晶子 石橋茂子 鶴木洋子 大石佳代 大坪尚和 朽網泰匡 下川ひさ子 末吉理恵
谷川侯司 谷川千春 谷川義則 月足まつみ 野上尚子 野田早百合 橋爪智子 濱田美紀
原ヨシ子

なお、調査においては多くの方々にご指導、ご協力いただきました。厚意に感謝いたします。

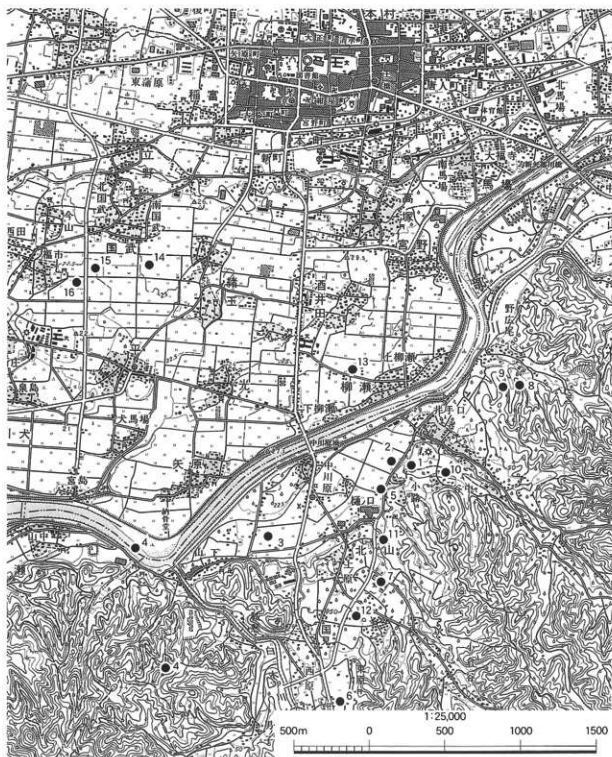
II 遺跡の位置と環境

幾野々原遺跡は、町の北西部に位置する標高約40m位の丘陵に位置する。周辺には弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落跡で46軒の竪穴住居と2点の移動式カマドが出土した北山八竜遺跡がある。また、この遺跡の北東約850mのところに、弥生時代後期後半から終末にかけての甕棺墓26基と箱式石棺墓4基が検出された曲松遺跡がある。さらに、縄文時代晩期の甕棺墓、弥生時代中期から古墳時代初頭の竪穴住居跡と甕棺墓等、古墳時代後期の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡、中世の陶磁器と多岐にわたる遺構・遺物が検出された北山今小路遺跡がある。幾野々原遺跡からも弥生土器から陶磁器まで幅広い遺物が出土しているため、北山今小路遺跡と類似している。周辺には横穴も多く、平成16年度に調査した野広尾横穴墓群が北東に約1kmのところにある。その向かいの谷には当町唯一の装飾横穴墓で線刻をもつ稲荷山横穴墓群があり、さらに南へ行くと「コ」の字屍床を持ち肥後タイプの特徴を顕著に表す小倉谷横穴墓がある。

少し離れるが、弥生時代の遺跡として谷川の辻遺跡があり、弥生時代後期中頃の土器が採集されており、立地は幾野々原遺跡・北山今小路遺跡と同じく小高い丘陵上にある。南西に2km程のところには戦国時代の永禄年間に蒲池鑑廣が築き、のち筑紫広門が入城していたという山下城跡がある。また、開窯の時期は定かではなく窯跡の位置もはっきりしないが、陶器や磁器が採集された男ノ子焼窯跡がある。



第1図 立花町位置図



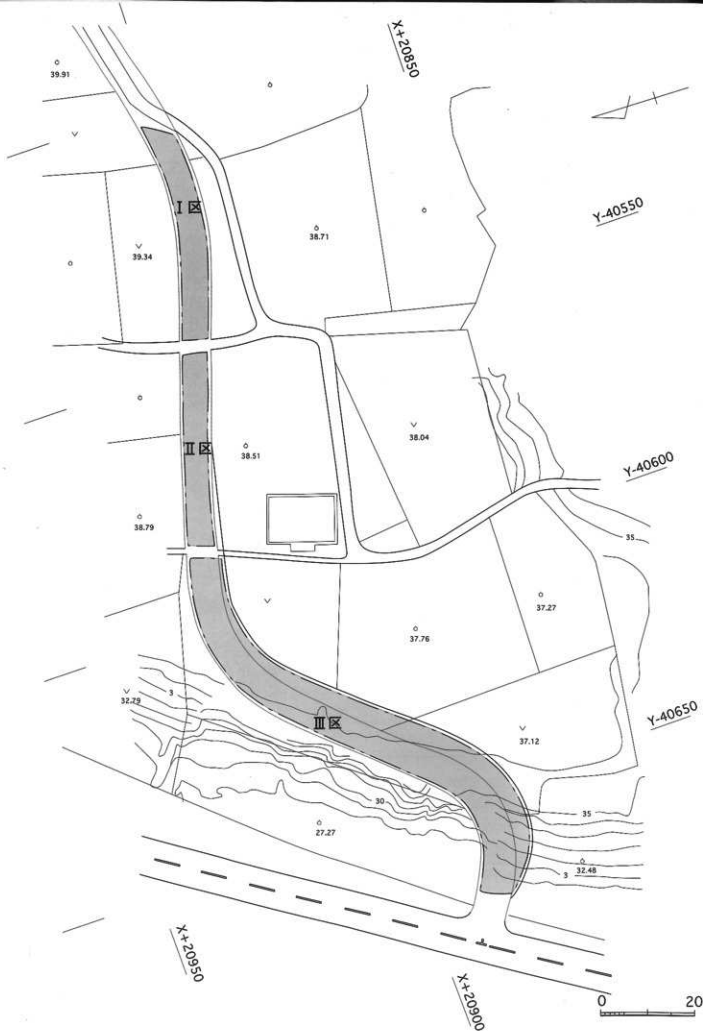
1. 幾野々原遺跡 2. 北山八竜遺跡 3. 北山今小路遺跡 4. 山下城跡 5. 北山小学校遺跡
 6. 白木西原遺跡 7. 北山小学校遺跡 8. 野広尾横穴墓群 9. 稲荷山横穴墓群 10. 六所宮古墳群
 11. 今出坂古墳 12. 茶臼塚古墳 13. アモメ遺跡 14. 前田遺跡 15. 大坪・前田遺跡 16. 中里遺跡

第2図 幾野々原遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000)



- | | |
|------------|-------------|
| 1. 幾野々原遺跡 | 9. 六所宮 2号墳 |
| 2. 北山八竜遺跡 | 10. 六所宮 3号墳 |
| 3. 北山浄清田遺跡 | 11. 谷中 1号墳 |
| 4. 小路古墳 | 12. 曲松遺跡 |
| 5. 今出坂古墳 | 13. 稲荷山横穴墓群 |
| 6. 北山今小路遺跡 | 14. 野広尾横穴墓群 |
| 7. 北山小学校遺跡 | 15. 千間土居 |
| 8. 六所宮 1号墳 | |

第3図 幾野々原遺跡周辺遺跡分布図(1/10,000)



第4図 調査区周辺地形図(1/800)

Ⅲ 発掘調査の記録

(1) 遺跡の概要

幾野々原遺跡は、福岡県八女郡立花町大字北山4981-1外に所在し、標高約37mの丘陵にある。この遺跡の調査は県営中山間地域総合整備事業立花地区の農道工事（小路～大倉谷線）という圃場整備事業にともなう発掘調査で、福岡県筑後農林事務所の依頼を受けて行った。工事面積1,600㎡を調査対象範囲とした。そのうち、西側の大倉谷寄りの農道は拡幅工事であり、東側は農道新設工事であったため、西側拡幅部分については事前に試掘調査を行い、埋蔵文化財が存在する可能性は低いことを確認した。一方、東側新設部分は試掘調査の段階で、遺構・遺物とも検出したため、発掘調査に至った。調査期間は平成17年7月21日～平成18年1月5日まで実施した。調査地は当時、東側から竹林、果樹園、畑であった。重機による樹木の伐採後、表土除去、遺構検出、掘削、実測、写真撮影等の作業を行った。調査地区ではもともとあった畦道で区切り、西側からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区とした。調査はまずⅠ区を9月上旬に終え、工事工程との関係上、Ⅱ区の途中からⅢ区を行い、最後にⅡ区に残りに取りかかった。調査の結果、各調査区毎に特徴ある遺構が検出された。また、それに伴う弥生土器・須恵器・土師器等の遺物が出土した。なお、今回の報告書に付した遺構番号は調査時の遺構番号と異なるものであり、その対照は以下のとおりである。

1号竪穴住居跡 ←S-9

2号竪穴住居跡 ←S-10

1号掘立柱建物 ←S-14

2号掘立柱建物 ←S-15

1号甕棺 ←K-1

1号土壇 ←S-2

2号土壇 ←S-3

3号土壇 ←S-4

4号土壇 ←S-5

5号土壇 ←S-6

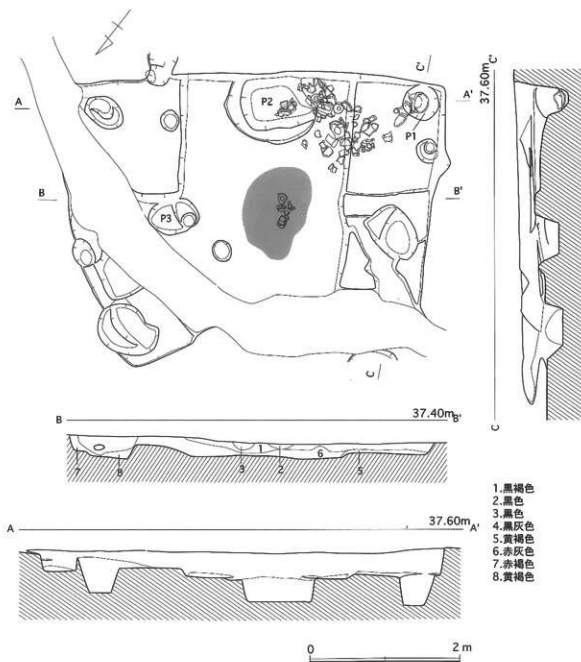
(2) 弥生時代

1. 住居跡

竪穴住居跡は2棟検出された。調査範囲が細長いため、面積の割には少数の住居跡しか検出されなかった。ただ、調査区内と区域外にまたがっている住居跡らしきものがあるが明確に断定できなかったため、実際はより多くの住居跡が存在した可能性がある。

1号竪穴住居跡（第5図）

Ⅲ区の中央付近で検出されたもので、6号溝に切られている。そのため、北側と東側2隅のプランが検出できず、6号溝と切りあっている北東の角部分の輪郭には不安を残す。深さは検出面から床面まで約30cmを測る。床面にいくつかのビットを検出したが、主柱穴とは認めにくい。中央部の埋土には炭化物が多く見られ、周辺の床面は赤く硬化していた。遺物の出土は主に東辺際のビット及び南東角のビット付近、中央部の焼土上であった。南側、北側には1段高い部分があり、ベッド状遺構の可能性も考えたが、切り合いが激しく断定できない。土層は中心から東半分を掘削して観察した。(1)は黒褐色で僅かに黄褐色の

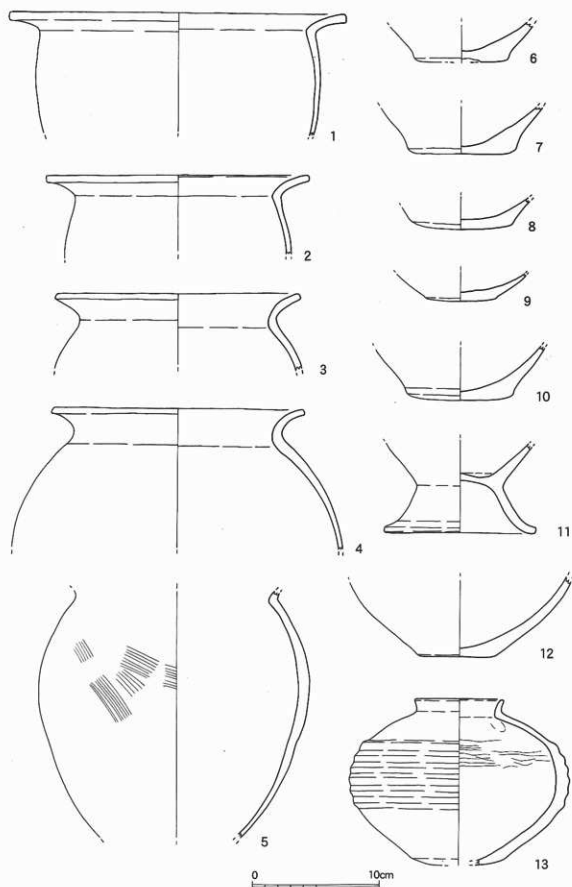


第5図 1号竪穴住居跡実測図(1/50)

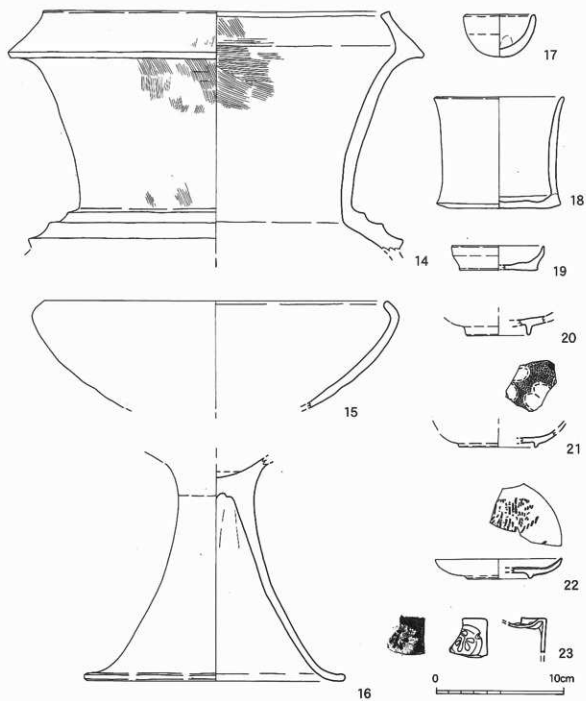
斑点が混じる。(2)(3)は黒色で土器片が混じり、炭も混じっていた。(4)の後世の溝に堆積した土は混じりなくサラサラの土である。(5)は黄褐色で地山の土と類似する。(6)は赤灰色を呈し、僅かに黄斑が混じる。(7)は赤褐色で、(8)は黒色土の混じった黄褐色を呈する。

出土遺物 (第6図～第8図)

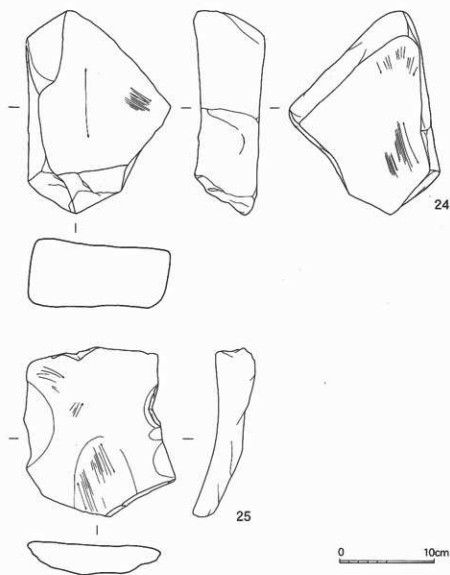
出土遺物の大半は弥生土器であり、僅かに中世・近代に属する遺物が含まれる。後者は6号溝に伴うものであろう。弥生土器は全て後期の範疇に納まるものである。5はP1から出土、9はP3から出土、12・24・25はP2から出土し、その他は床面からの出土である。1～4は甕の口縁部で、1は復元口径26.4cmで4つの中では最も大きい。弧を描きながら大きく外反する口縁部を有する。焼成は良好であるが、磨耗が激しく調整は不明である。2は「く」字状に外反する口縁部を有する甕。復元口径20.6cmで、色調は内面外面とも淡褐色であり、口縁部外面にナデが施される。3は口唇部が平坦面をもつ「く」字状口縁で、復元口径19.0cm。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は1～3mmの薄茶・灰色砂粒が大量に含まれる。雲母・石英を多量、角閃石が微量含有される。焼成は良好である。調整は内面は磨耗により不明であるが、外面は全面にナデが認められる。4は屈曲部に丸みを帯びた「く」字状口縁で、口径19.8cmを測る。色調は外面が黄橙色で、内面が淡黄褐色を呈し、胎土は3mm程度の砂粒を多量に含む。焼成は良好。全面にナデを施しているのが確認できる。5は口縁部・底部を欠損する甕。頭部の形状から、上記の口縁部と同様の形態と考えられる。最大径は胴部中央よりやや上位にある。色調は1～4とほぼ同じく、外面が淡褐色、内面が橙褐色を呈する。胎土は全体的に1～3mmの粗い薄灰色の砂粒を大量に含み、石英・角閃石を多量、長石を微量含有。焼成はやや良好であるが、大部分がひどい磨耗のため、調整は外面の一部にハケメを認めるのみであった。6～10・12は甕もしくは壺の底部。僅かに凸レンズ状を呈する底部であるが、7は平底に近い。6は底径7.2cmを測る。7は底径8.6cmを測る。8は底径7.8cmを測り、色調は外面が黄褐色で、内面が暗黄褐色を呈する。胎土は6mm以下の砂粒を僅かに含み、焼成は良好、磨耗により、調整不明である。9は底径5.8cmのレンズ状、色調は淡橙色を呈する。調整は磨耗が激しく不明である。10は底径5.8cm、色調は淡橙色を呈する。胎土は1～3mmの白・灰色砂粒を多く含み、調整は磨耗のため不明である。12は底径5.6cmであり、調整は磨耗のため不明である。外面に黒斑が認められる。11は脚台部を伴う甕の底部。脚台底径11.6cm、現存器高9.0cm。「ハ」の字に開脚し、裾部は強く外反する。色調は明黄褐色を呈する。調整は外面全面にナデが施され、内面には貼り付け後ナデを行った際の指痕が残るが、磨耗により調整の詳細は不明である。13は短頸甕で約2分の1残存している。復元口径7.0cm、器高13.2cmを測る。口縁部は僅かに外反する。胴部は強く張り、中位付近に断面三角形の低い突帯を6本有する。胴部最大径は17.6cm。底部は欠損が多いが、凸レンズ状となると考えられる。色調は外面内面ともに淡黄橙色を呈する。焼成は良好だが大部分が磨耗により調整不明であるが、口縁部付近～胴部中位の内面には指圧痕及びへら状の工具跡が認められる。14は袋状口縁で口縁部から頸部まで残存する。口唇部はシャープな方形をなし、屈曲部は強く外へ突出する。頸部には低い断面三角形の突帯が3本貼り付けられる。復元口径は27.4cmとこの竪穴住居跡から出土した遺物の中で最大である。色調は淡灰褐色を呈し、胎土には1～3mmの薄茶色砂粒・石英・雲母を大量に含んでいる。焼成は良好で、表面は一部磨耗しているが、ほぼ全面にハケメを施していたと思われる。15は鉢、もしくは高杯の杯部である。復



第6圖 1号竖穴住居跡出土遺物実測図①(1/3)



第7图 1号竖穴住居跡出土遺物実測図②(1/3)



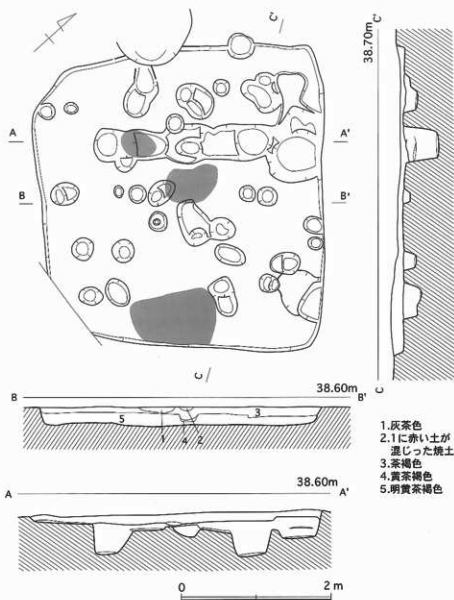
第8図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図③(1/4)

元口径27.2cmで、口縁先端部は丸みを帯びて内傾する。かなり磨耗しており、胴部に僅かなナデが認められる。16は高坏の脚部で、底径20.2cmを測る。内部に絞り痕が認められ、接合部は指押さえ後ナデを施している。脚部裾に向かうほど強いカーブを描き、下端0.7cmが接地する。17は手捏ね土器で、口径5.4cm、器高3.3cmを測る。椀を模したものであろうか。調整は全面にナデを施し、内部底面・口縁の一部に指痕が認められる。18はコップ形土器で、胴部は内側に緩やかに湾曲する。底部は平底で、胴部との境は明瞭な稜を有する。復元口径10.4cm、底径9.6cm、器高8.4cmを測る。器壁は5～6mm程度の厚さであり、薄い。色調は外面が淡灰褐色、内面が淡茶灰色を呈し、胎土は1～2mm大の石英・長石粒を多く含む。焼成は不良であり、外面中位から下にかけて黒斑を有する。

19は土師器の皿であり、復元口径7.2cm、復元底径6.0cm、器高1.9cmを測る。色調は外

面はにぶい薄茶色、内面は口縁部から底部にかけて橙褐色から次第に濃茶色に変化する様相を示す。胎土は1mm以下の赤色砂粒を少量、角閃石を微量含有し、焼成は良好。器高は比較的lowく、底部に糸切り痕がみられる。回転ナデの調整で、3分の1残存している。

20は陶器の皿で体部下から底部にかけて5分の1弱現存し、復元底径5.0cmを測る。内面には見込み部に幅1cmの蛇の目釉剥ぎが見られ、別製品が釉着したものを取り外した時の欠損が僅かにみられる。釉調は白灰色で、帯円状の掻き取り部は薄茶色を呈する。高台の畳付は露胎である。胎土は精良で、焼成は良好である。



第9図 2号竪穴住居跡実測図(1/50)

21~23は磁器である。21は皿で型によるにぶい緑色の文様が施され、底部の一部のみが現存。復元底径6.2cmを測り、胎土は精良である。色調は乳白色で、釉調は僅かに緑味を帯びた乳白色を呈する。胎土は精良で、焼成は精緻。全面に施釉されるが、疊付は露胎。22は皿で型による文様部分が濃緑色であり、竹を表しているのであろうか。口縁から底部にかけて5分の1が残存しており、復元口径10.0cm、器高1.6cm、復元底径4.8cmを測る。色調は乳白色で、釉調は淡緑色を呈する。全体的に薄く施釉しており、胎土は精良である。23は器種不明の陶器である。色調は灰白色で、外面のみ暗赤褐色の釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。表面に「永」字らしきものが型押しされていて、使用目的等是不明。大正時代の遺物か。

24・25は大形の砥石である。24は最大長22.2cm、最大幅15.0cm、最大厚み7.1cmを測り、色調は明黄褐色である。砂岩製で、裏表ともに全面的に砥ぎ痕がみられる。25は最大長17.3cm、最大幅15.1cm、最大厚み4.1cmを測り、色調は中心部が灰白色、周辺部が明黄褐色である。24と同じく砂岩製であり、片面の数箇所に砥ぎ痕がみられる。

2号竪穴住居跡(第9図)

Ⅲ区の東端でⅡ区に近い位置から検出された住居跡である。西辺は直径約1.1mのビットにより中央付近を切られる。南北辺4.0m、東西辺約3.5mを測り、深さは検出面から床面まで約10cmを測る。床面にて幾つかのビットを検出したが、どれも主柱穴とは認めにくい。遺物の出土は土層(5)からでまとまった量が出土したが、接合できたのは僅かであり、他はほとんどが小片であった。この層より下が張り床となっている。土層は中心から東半分を掘削して観察した。最も古い層は(5)であり締まりがある。(4)もほぼ同じような色であり、(3)はややしまりがない。(2)は焼土であり、赤い土が混じる。(1)は(2)とほぼ同じであるが、より暗い色である。3箇所に焼土がみられる。

出土遺物(第10図)

1は弥生土器の甕の底部である。凸レンズ状の底部は底径7.0cmを測り、色調は内外ともに黄褐色を呈する。胎土は3mm以下の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。磨耗が激しいが、内面底部に指痕らしきものが認められる。

1号掘立柱建物(第11図)

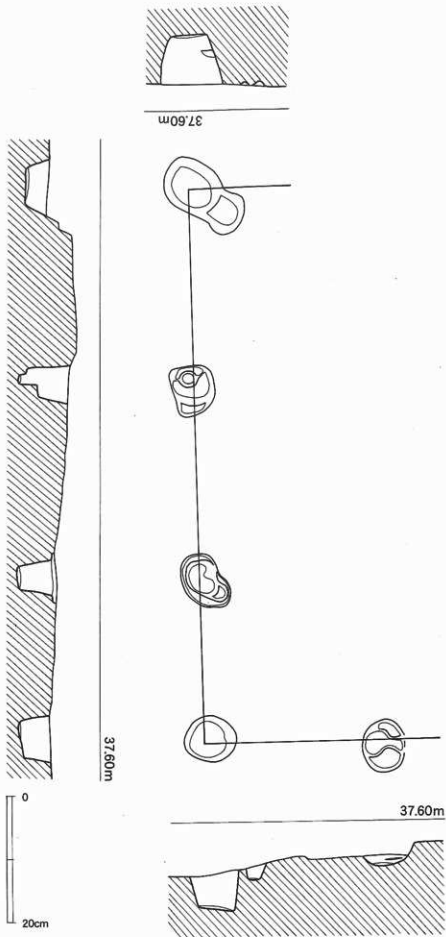
Ⅲ区の中央付近にあり、西側のみ検出した。東側は調査区外へ延びる。1辺は3間(8.3m)で、他辺は2間以上であるが正確には確認しえない。各柱穴間の距離はおよそ3mを測り、柱穴の深さは最も深いもので90cmを測る。5つの柱穴のうち、2つは2段掘り、2つは3段掘りで形成される。各柱穴から遺物が出土している。

出土遺物(第13図1)

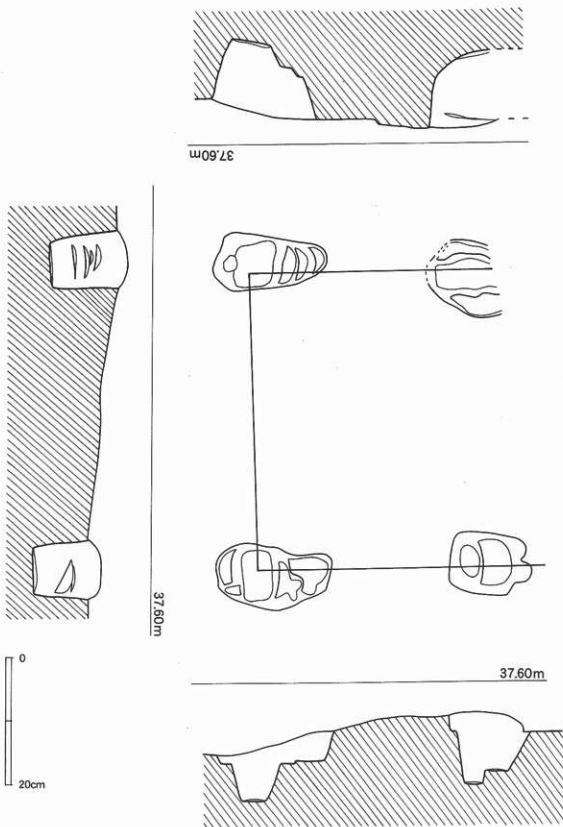
1は弥生土器の甕である。小形の部類に入り、復元口径14.0cmを測る。口縁部は直線的に広がり、口唇部は丸みを帯びている。色調は黄橙色を呈する。胎土は1~2mmの砂粒を多量に含み、焼成は良好である。調整は大部分が磨耗しており、僅か



第10図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)



第11图 1号掘立柱建物实测图(1/60)



第12图 2号掘立柱建物实测图(1/60)

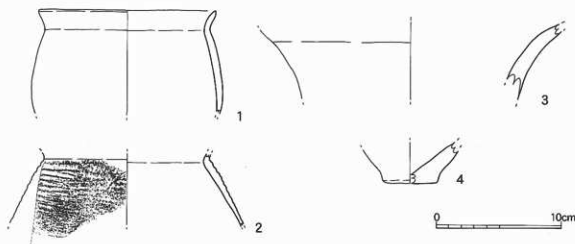
にナデを確認できる程度。微細な粒子を多く含むため、胎土の砂粒含有率に反して表面は滑らかである。

2号掘立柱建物（第12図）

Ⅲ区の真ん中あたりで、1号掘立柱建物に一部重なるように検出される。また、同じく調査区境界で東側を切られる。1間（4.7m）×2間であろうか。柱穴としては1号掘立柱建物より大きく、深さ49cmを測る。図面左上の柱穴は床面から、側面にもたれるように直径約30cmの河原石が発見された。

出土遺物（第13図2～4）

2～4は弥生土器の甕である。2は復元頸部径12.0cmを測り、頸部の屈曲部から30°くらいに広がる胴部の一部が現存している。胴部の調整はタタキによるもので、外面に粗いタタキ痕を残す。色調は、外面は黄橙色を呈し、一部黒斑を有する。内面は淡橙色である。胎土は1～3mmの砂粒が混じり、石英を少量、透石・角閃石・長石・雲母を微量含有する。焼成は良好である。3は甕の口縁部付近で、色調は淡橙色を呈する。胎土は1～3mmの砂粒が多く混じる。焼成は良好である。4は甕の底部で4分の1のみ残存している。復元底径4.4cmを測り小さい。底面は僅かに凸レンズ状となる。色調は外面が橙色、内面が灰褐色を呈する。胎土は1～2mmの砂粒を大量に含むため、土器表面が非常に脆い。焼成はやや不良である。



第13図 掘立柱建物出土遺物実測図(1/3)

2. 甕棺

甕棺はⅠ区から1基のみの検出であった。地元の人の話では、調査区のあるところから北に向かった丘陵斜面に甕棺が多くあったとのことであった。この1基もⅠ区の北際に検出されたため、Ⅰ区より北の台地から斜面に向かい、多くの甕棺があるだろうと予想できる。1号甕棺の墓壇はⅠ区を横断する1号溝の下に検出された。1号溝により上甕の約上半分が削平されている。

1号壺棺（第14図、第15図）

1号壺棺の合せ口方法は覆蓋であり、上下とも口縁部を打ち欠いている。さらに、合せ口の部分には明黄褐色の粘土を使用して目張りされている。中形棺と呼べる規模であり、検出面での墓壇の規模は長さ104cm、幅76cmを測る。下甕が収まる墓壇は棺がぎりぎり収まる大きさで掘削されている。棺の埋置角度は27.5度を測る。下甕には穿孔を有するが、穿孔は墓壇床面に接する位置に向けられている。

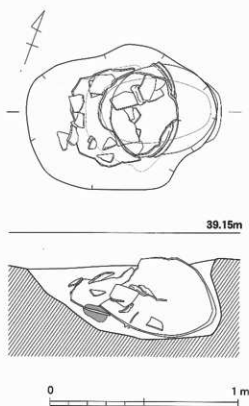
上甕は口縁部を丁寧に打ち欠き、胴部の一部から底部にかけて欠損している。現存器高約39.8cm、胴部最大径57.6cmを測る。色調は外面が概ね灰褐色から淡黄褐色だが、黒斑が大部分を占める。内面にはぶい淡茶褐色を呈し、赤色顔料が認められる。胴部中位より上に「コ」字状突帯を一条配し、刻み目を施す。外面全体と内面打ち欠き部付近は磨耗により調整不明であるが、打ち欠き部より上はタタキ後ハケメ調整がみられる。胎土は1mm程度の薄茶・灰色の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

下甕は口縁部を打ち欠き、胴部には2条の突帯が貼り付けられている。「コ」字状の突帯には刻み目が施されており、刻み目は上甕より狭い間隔で配される。また、突帯下に楕円状に外側から孔を焼成後に穿つ。底部はとがり気味の丸底である。一部磨耗しているが、外面内面ともに隙間なく粗いハケメを施している。現存器高59.5cm、胴部最大径49.4cmを測り、色調は外面内面ともにぶい淡茶褐色を呈する。外面には黒斑がみられる。胎土は1mm単位の薄茶・灰色の砂粒を大量に含む。焼成は良好である。

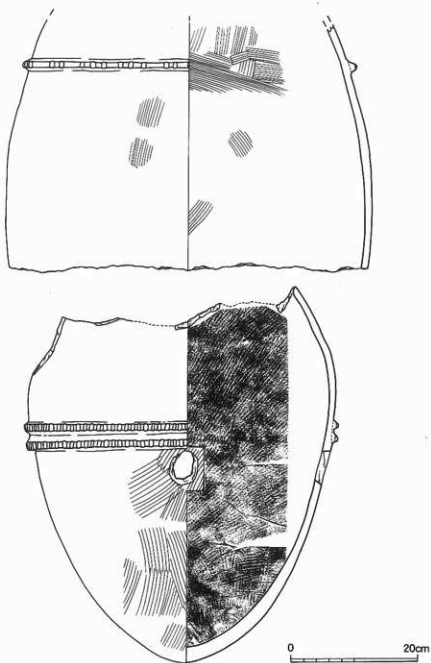
3. その他

1号溝（付図 I 区遺構配置図）

1号壺棺から南側に延びる溝状遺構である。北側は幅1.8m、南側に行くにつれ狭く63cm程度、長さ4.3mの土壌状に検出された。深さは深いところで20cmを測り、中程にビットが検出された。遺物は出土していない。



第14図 1号壺棺実測図(1/20)



第15図 1号墓棺実測図(1/6)

3号溝 (付図 III区遺構配置図)

Ⅲ区の西側斜面の中間あたりに位置する溝状遺構である。調査区を南北に横断しており、幅約1.2m、深さは斜面上から下場まで56cmを測る。遺物は、斜面上からの流入によるものか弥生土器片が最も多く出土している。

(3) 中世

1. 土壌

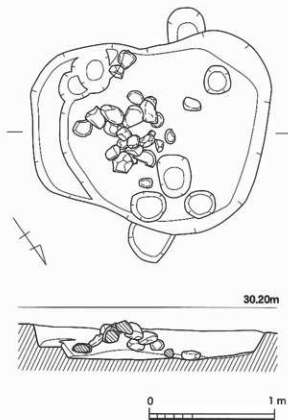
土壌として5基取り上げる。5基ともⅠ区からの検出である。他にも土壌状の遺構はいくつか検出しているが、特色のあるもののみを扱った。

1号土壌 (第16図)

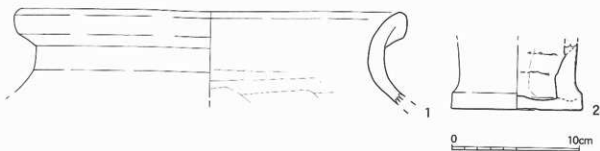
Ⅰ区の中央よりやや東寄りの位置から検出した。プランは楕円形もしくは中程が僅かに窪むひょうたん形である。周辺には幾つかのビットと土壌があり、1号土壌は2つの土壌をきる形で検出される。南東側には約17cmの段を有し、深さ約19cmを測る。中央には川原石と角ばった石の両方がまとまって散在する。

出土遺物 (第17図)

1は陶器の甕で、口縁部の8分の1のみが現存する。復元口径30.0cmを測る大甕であり、備前かと考えられる。口縁部は緩やかに外反させ、端部は外折させて玉縁状に肥厚させている。表面はざらざらしており、色調は外面が灰赤褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。胎土は1~3mm程度の白色・茶色・黒色の砂粒を多く含み、一部5~6mmの小石を含有する。微細な角閃石と雲母が少量認められた。焼成は良好で、口縁部は回転ナデで調整。内面は頸部や下位にへら状工具による調整痕が残る。2は瀬戸焼の瓶子であり、縮腰タイプである。13世紀頃のものであろうか。出土したのは底部のみで約6分の1を欠損する。底径10.4cmを測り、色調はにぶい薄灰色で、外面には明黄緑色の灰釉が施釉される。内面は灰釉が流れるが基本的には露胎である。胎土は精良で焼成は良好だが、灰釉が剥落している部分がみられる。外面底部は凹凸が多く、壁体が多数付着している。調整は内面底部をナデ、側面をヨコナデで仕上げる。



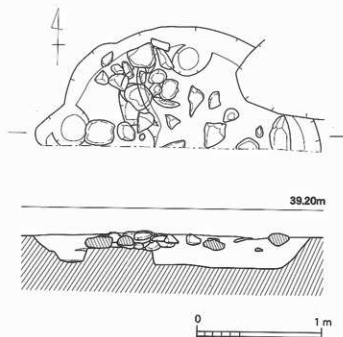
第16図 1号土壌実測図(1/30)



第17図 1号土坑出土遺物実測図(1/3)

2号土坑 (第18図)

I区からの検出で、1号土坑の南側に位置する。東側を別の土坑に切られ、半分に満たない位置で調査区境界に切られる。プランは円形であろう。深さは約26cmを測り、西側に約12cmの段を有する。土坑には全体に石が散乱しており、川原石及び角ばった石が混在する。ピットは内部に2つ検出され遺物もそこから僅かに出土したが、細片であるため



第18図 2号土坑実測図(1/30)

復元できなかった。

3号土壙（第19図）

I 区の中央よりやや東に寄った位置にあり、1号土壙の西に検出される。プランはほぼ円形であり、東側を別のピットに僅かに切られる。埋土には炭化物を多く含み、赤く硬化した焼土が東側広範囲と北側に検出された。深さは約20cmを測り、土師器の皿が床面より高いレベルで1点出土した。

出土遺物（第20図）

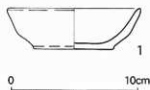
1は土師器の皿である。口径10.4cm、底径6.0cm、器高3.3cmを測り、色調は淡橙色を呈する。胎土は1mm以下の石英を多量に含み、焼成は良好である。調整は外面にナデ、底部に糸切り痕、内面底部に指痕が見られる。



第19図 3号土壙実測図(1/30)

4号土壙（第21図）

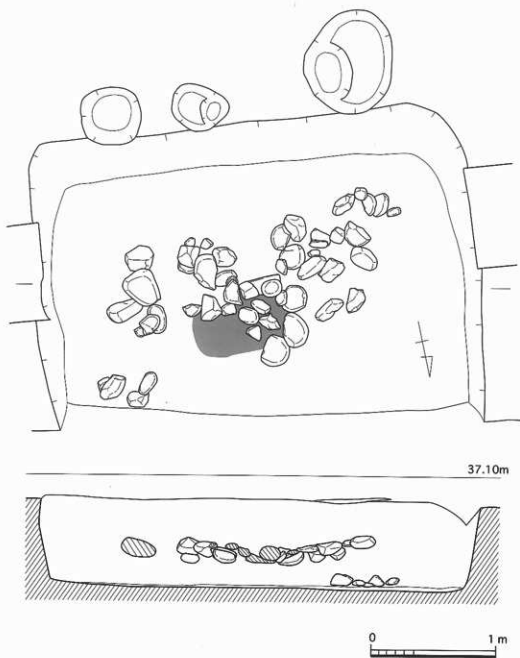
I 区の西側にあり、付近にはピットをいくつか検出する。試掘調査の際、この土壙を東西に横断するようにトレンチを入れている。南辺は3つのピットにより僅かに切られており、北辺は調査区境界により切られる。よって東西辺は現在のプランより延びるであろう。プランは正方形もしくは長方形であり、南辺は約3mを測る。深さは遺構検出面から68cmを測りかなり深い。中央付近の床面には焼土の広がりが存在し、周辺には川原石及び角ばった石が散在する。川原石は火を受けたものが多く、割れているものや石表面に煤が付いているものもある。



第20図 3号土壙出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第22図～第24図）

1は甕の口縁部で、常滑焼である。「N」字状口縁を呈し、縁帯幅は2.0cmを測る。内面には自然釉がかかる。色調は外面内面ともに暗灰褐色で、胎土は1～3mmの白色砂粒、



第21図 4号土坑実測図(1/30)

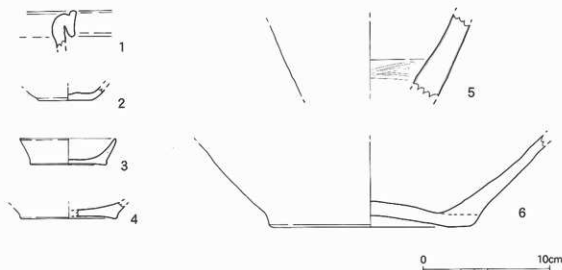
1mm程度の雲母を少量含む。

2～4は土師器の皿である。2は底部のみ現存しており、底径4.0cmを測る。色調は淡橙色を呈し、胎土は石英を少量含む。焼成は良好である。調整は全面にナデ、内面底部は僅かに肥厚する。3は5分の3を欠損している。復元口径7.4cm、復元底径6.0cm、器高2.0cmを測り、色調は内外ともに赤褐色を呈する。胎土は1mm以上の雲母を少量含み、1mm以下の砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。外面底部には僅かに糸切り痕がみられ、他は全面的にナデ調整である。4は底部2分の1を欠損している。復元底径は9.0cmを測り、2・3より大きい。色調は赤褐色を呈し、胎土は1mm程度の砂粒を少量含有する。焼成は良好。全面にナデ調整を施し、底部は上げ底である。

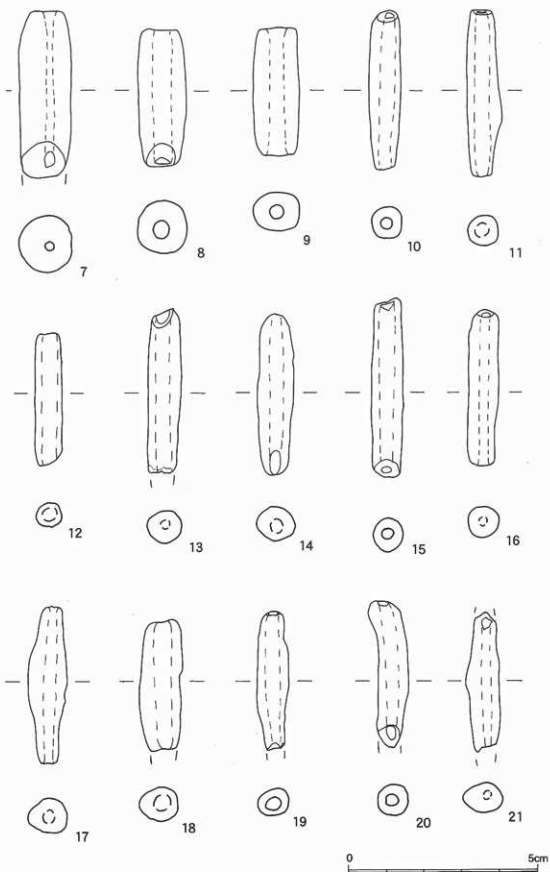
5は瓶の底部近くである。色調は薄灰色で、内外面には白濁した釉をかける。胎土は精良で、焼成は良好である。内面の一部にヘラの痕が明確に残る。6は甕の底部で、5分の1のみ現存する。上げ底の底部は復元底径16.0cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は3～5mmの小石を一部に含み、黒色砂粒が微量混じる。1mm程度の長石を少量、石英を微量含有している。焼成は良好であり、調整は底部にヘラ切り、内面底部の一部に工具ナデのような痕が認められる。7～32は土鍾で、観察表（第1表）を参照されたい。

5号土壙（第25図）

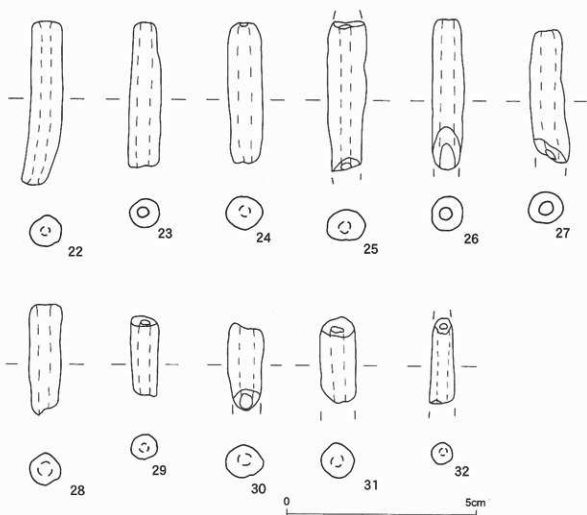
I区にあり、4号土壙の西側に並ぶ。この土壙も試掘調査の際のトレンチが横断しており、周辺ピットとの切り合いが激しいため、遺構のプランには不安を残すが、ほぼ楕円形



第22図 4号土壙出土遺物実測図①(1/3)



第23图 4号土坑出土文物实测图②(1/1)

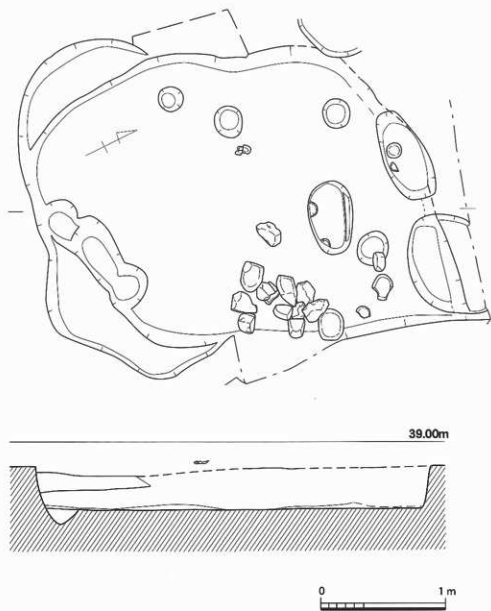


第24図 4号土壌出土遺物実測図③(1/1)

を呈する。土壌内に数基のピットを検出したが、その内の幾つかは土壌を上から切るものである。東側には川原石と角ばった石がまとまって出土する。深さは32cm程であり、直径は3m強を測る。プラン形は1号土壌と類似する。

出土遺物（第26図、第27図）

1～4は土師器の皿である。1は口径10.8cm、底径7.0cm、器高1.9cmを測り、色調は赤褐色を呈する。胎土は1mm単位の赤色砂粒が多く混じり、1mm程度の雲母を少量含む。焼成は良好である。外面底部に糸切り痕、それ以外にナデ調整を施し、内面底部には指痕が認められる。5分の1を欠損している。2は尖り気味の口唇部を有し、口径10.4cm、底径7.2cm、器高1.6cmを測る。口縁部をわずかに欠損するものの、完形に近い。色調は橙色を呈し、胎土は1mm程度の赤色砂粒子を多く含む。外面底部の粘土紐痕はナデで薄く消されている。表面は全体的に凹凸が多い。また底部以外の部分もナデを施されている。3は2よりさらに尖り気味の口唇部をもち、口径10.8cm、底径7.6cm、器高2.3cmを測る。色調

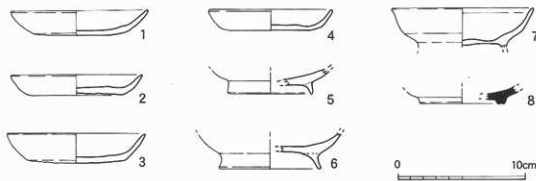


第25図 5号土坑実測図(1/30)

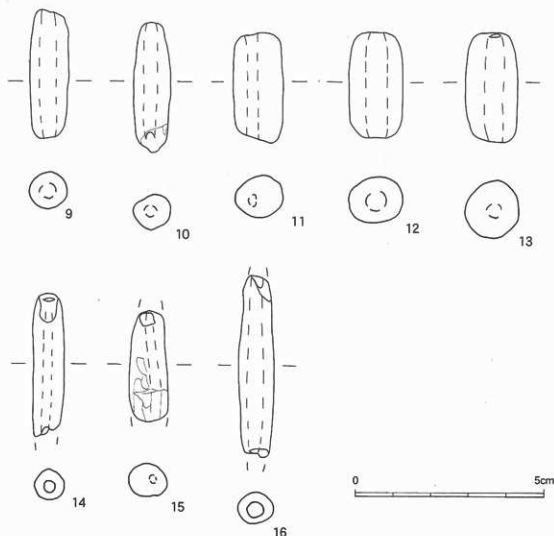
は淡橙色を呈し、胎土は1~2mmの赤色砂粒子を多量に含有する。焼成は良好である。レンズ状の底部には粘土紐痕があり、一部に粘土紐を指で押さえた痕が認められた。また煤のようなものが口縁部に付着している。全体的にナデ調整で、完形品である。4は口径9.6cm、底径7.0cm、器高1.6cmを測り、色調は橙色を呈する。胎土は精良であり、焼成は良好である。磨耗により調整は不明であるが、外面底部にわずかに粘土紐痕が認められた。口縁部の一部が欠けていることを除けば完全に現存している。5~7は土師器の坏である。5は底部破片で、復元底径6.6cmを測る。貼り付け高台を持つ底部はナデで仕上げられ、高台やや上は回転ナデ調整で仕上げる。色調は外面が淡黄橙色、内面が黒褐色を呈し、胎土は1mm程度の赤色砂粒が少量混じっている。内面にはいぶしがみられ、ナデ調整で仕上げる。焼成は良好である。6はハの字に開く高台をもち、復元底径8.0cmを測る坏の底部である。色調は橙色を呈し、胎土は赤色砂粒を中量、2mm程度の長石を少量含む。焼成は良好である。高台部は貼り付け後ナデ調整される。外面内面ともにナデ調整で仕上げる。7は復元口径11.1cm、復元底径6.9cmの坏の底部である。脚部は欠損する。全面を回転ナデにより調整する。体部中位のやや下で稜をなし、口縁部へ続く。内面底部付近には指痕が残る。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は3mm以下の雲母を少量、赤色砂粒を少量含む。焼成は良好である。口縁部に煤が付着する。8は須恵器の坏である。貼り付け高台を有する底部小片であり、復元底径6.6cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は精良である。調整は全面に回転ナデを施し、高台内部はナデがみられる。全体的に表面は滑らかだが多少軟質である。9~16は土錘で、観察表(第1表)を参照されたい。

2. その他

中世である可能性のある土壇やピットは多数存在するが、時代を特定できなかった。



第26図 5号土壇出土遺物実測図①(1/3)



第27図 5号土坑出土遺物実測図②(1/1)

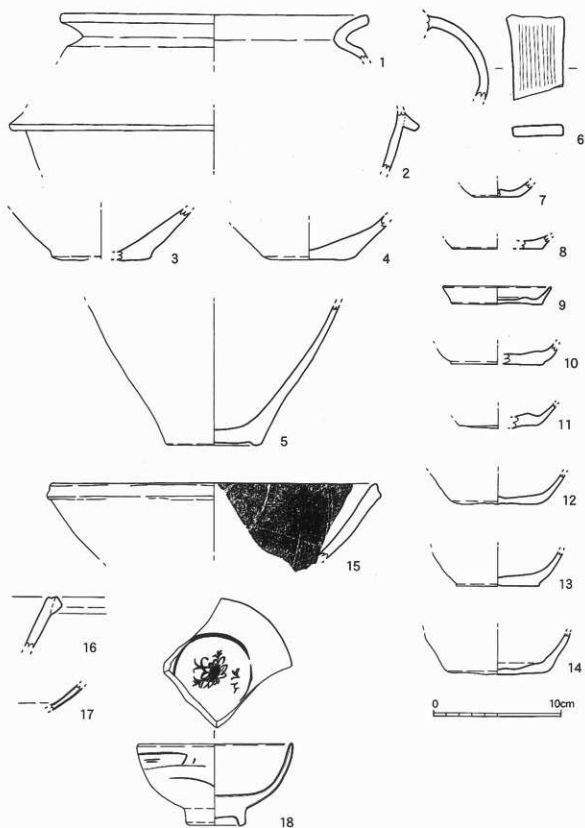
(4) その他

1. I区ビット等 (付図 I区遺構配置図)

I区では多くのビット及び土坑が検出された。甕棺は唯一1基確認されたが、それ以外は出土遺物からみても中世が中心である。

出土遺物 (第28図～第32図)

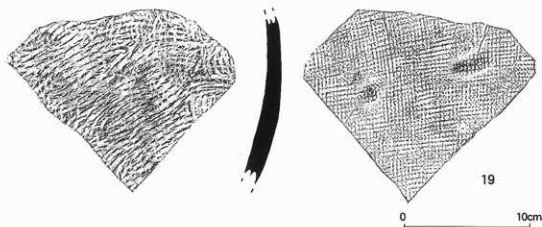
1～5は弥生土器の甕である。1は口縁部で6分の1現存する。強い弧を描きながら外反する口縁部であり、頸部のやや下位に一条の稜をなして胴部へと続く。復元口径12.0cmを測り、色調は外面が橙色、内面が濃黄褐色を呈する。胎土は1mm程度の白色砂粒及び石英を中量含み、角閃石を微量含有する。焼成は良好である。調整については、口縁部はヨコナデ、他はナデと思われる。口縁部内面には煤が付着する。2は甕の胴部であろうか。高さ約1cmの断面方形の突帯を有する。外面に黒斑を有する。突帯部はヨコナデで仕上げられ



第28図 I 区ビット等出土遺物実測図①(1/3)

るが、その他の調整は磨耗により不明である。色調は明褐色を呈し、胎土は灰色の砂粒を大量に含み、石英が少量混じる。焼成は良好である。3は底部で、4分の1のみ現存している。凸レンズ状をなすもので、復元底径7.8cmを測り、色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈する。胎土は白・茶・黒色砂粒を中量含み、焼成は良好である。調整は底部にナデが僅かに見られる以外は、磨耗のため不明である。4も凸レンズ状を呈する底部であり、2分の1のみ現存し、底径6.0cmを測る。色調は暗灰橙色を呈し、胎土は1mm以下の石英が多量、微細な角閃石・長石が少量混じる。焼成は良好であるが、磨耗が著しく、調整は不明。ただ、内面底部に指痕らしきものがみられ、外面底部には煤が付着していた。5は丹塗りの甕であり、胴部中位より下から底部が現存する。底部は高台状となる上げ底。色調は外面が明赤褐色、内面が淡橙色を呈し、胎土は1mm以下の黒色砂粒を大量に含有し、その中に薄茶色の砂粒が若干混じる。角閃石・長石を多量に含み、石英を微量含む。焼成は良好である。外面の顔料は大部分が剥落しており、調整もまた観察し難い。内面はナデ調整で仕上げる。6は弥生土器で、ジョッキ型土器の把手であろうか。中心幅4.0cm、厚さ1.2cmを測る。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土は1mm程度の赤色及び黒色砂粒を多く含む。また石英を多量、角閃石を微量含有する。焼成は良好である。上部に本体への接合面がみられ、把手部分の3分の1ほどを欠損している。調整は表裏ともにハケメで仕上げる。

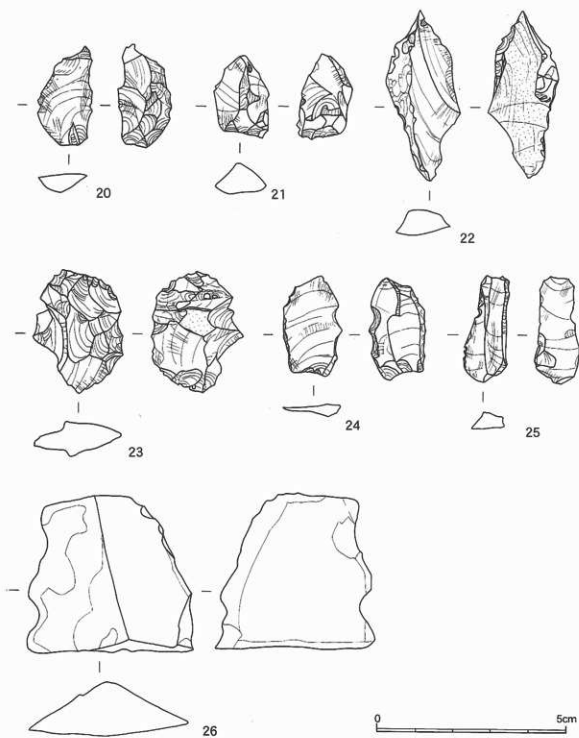
7~14は土師器の皿である。7は小皿で復元底径3.6cmを測るが、底部6分の1しか現存しておらず復元に疑問を残す。色調は淡橙色を呈し、胎土は1mm程度の赤茶色砂粒を多量に含み、雲母を少量含有する。焼成は良好であるが、調整等は磨耗のため不明である。8は復元底径7.0cmを測る皿の底部小片である。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は精良である。焼成は良好であり、調整は磨耗により確認しえない。9は3分の1を欠損し、復元口径8.4cm、底径7.2cm、器高1.4cmを測る。色調は外面が淡橙色、内面が橙色を呈する。胎土は1mm以下の赤茶色及び黒色砂粒を中量、1mmの雲母を少量含む。焼成は良好である。



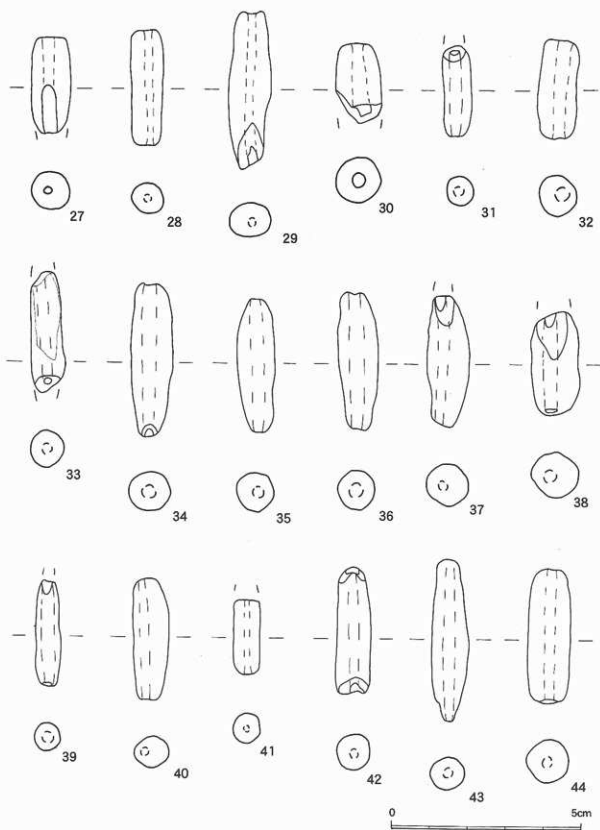
第29図 I区ビット等出土遺物実測図②(1/3)

外面底部には糸切り痕がみられ、底部以外の全面にナデ調整を施している。7~14の中では最も浅く、内面は口縁の立ち上がりに沿って強いナデが入ることにより中央部は肥厚する。10は底部のみ2分の1が現存している。復元底径7.2cmを測り、色調は濃橙色を呈する。胎土は1mm以下の赤色砂粒を中量含み、焼成は良好である。外面は磨耗のため調整不明だが、内面にはナデ調整がみられる。11は底部小片で、復元底径6.3cmを測る。色調は灰白色を呈し、1mm程度の雲母を少量含む。焼成は良好である。内面にはナデ調整がみられ、それにより肥厚している。外面底部は中央のみが接地する形である。12は底径8.4cmを測る皿の底部である。色調は橙色を呈し、胎土は1~2mmの黒色及び赤色砂粒を中量含み、石英を微量含有する。焼成はやや不良。底部切り離しは糸切りで、その後ナデ調整がみられる。底部以外は全てナデ調整で仕上げる。13は底部のみ2分の1現存する皿であり、底径7.4cm、現存器高2.7cmを測る。色調は橙色だが、底面のみ灰色がかった淡橙色を呈する。胎土は1mm程度の赤色及び黒色砂粒を多く含む。底部には糸切り痕があり、それ以外の部分はナデ調整で仕上げる。14は底部片で、底径7.8cm、現存器高3.3cmを測る。色調は外面が淡黄褐色で一部薄灰褐色、内面が淡灰褐色を呈する。胎土は1~3mmの白色砂粒を中量含み、調整は外面全体と内面の一部にナデ調整がみられる。また内面底部には粘土紐痕が認められる。15は瓦質の播鉢で、口縁部の一部のみ現存する。口縁部は横ナデで、口唇部端は僅かに肥厚し、やや外に開く。内面には底部から口縁部へと延びる播目が入る。外面はナデ調整、内面には灰色のいぶしが観察される。復元口径は25.6cmを測り、色調は外面が灰白色、内面が灰色を呈する。胎土は1mm以下の黒色砂粒を少量含み、焼成は良好である。16は土師器で、鉢の口縁部小片である。断面は三角に近い玉縁状の口縁部をもち、貼り付けである。色調は外面が暗黄褐色で、内面が黄橙色を呈する。胎土は1mm程度の白灰色砂粒及び石英を少量含み、角閃石を微量含有する。焼成は良好である。調整はナデによるもので、外面の一部に指圧痕が認められる。

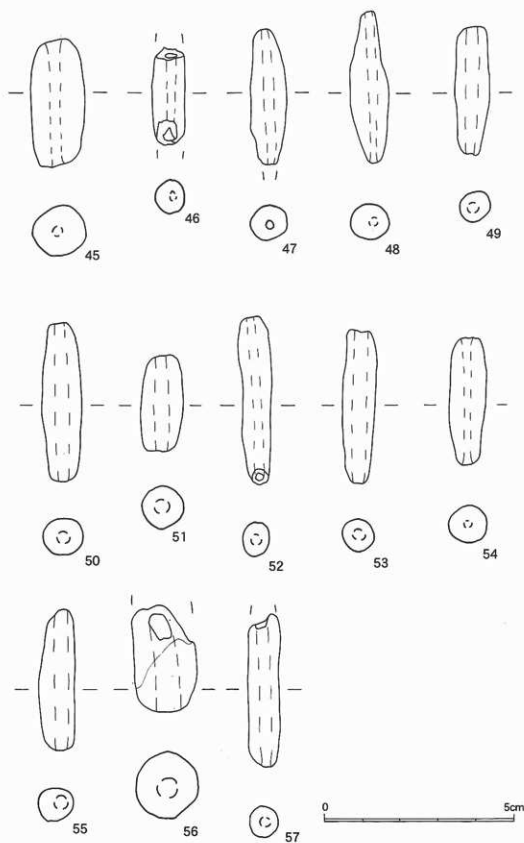
17・18は磁器の碗である。17は白磁で、体部小片である。色調は乳白色で、釉調は淡青白色である。内外面に釉が施される。胎土は精良で、焼成は良好である。18は青磁で、龍泉窯系IV類のものであろうか。4分の1のみ現存し、復元口径12.2cm、底径4.0cm、器高6.4cmを測る。色調は胎土が灰白色、釉調は緑灰色を呈する。胎土は精良で、焼成は良好である。調整は外面がヘラケズリ、高台内の釉掻き出しの中心に僅かに3mm程度の釉が残る。全面に施釉され、内面底部には花模様の型押しがみられる。19は須恵器の甕の胴部である。色調は内外面ともに暗灰色を呈し、胎土は1mm程度の黒色砂粒を少量含有する。焼成は良好である。外面のタタキ目は格子文、内面は青海波の当て具痕を明瞭に残す。外面に3ヶ所ほど空気を含み膨らんだ部分がある。20~26は黒曜石及びサヌカイトで、観察表(第3表)を参照。27~57は土錘で、観察表(第1表・第2表)を参照されたい。



第30図 I区ビット等出土遺物実測図③(1/1)



第31図 I区ビット等出土遺物実測図④(1/1)



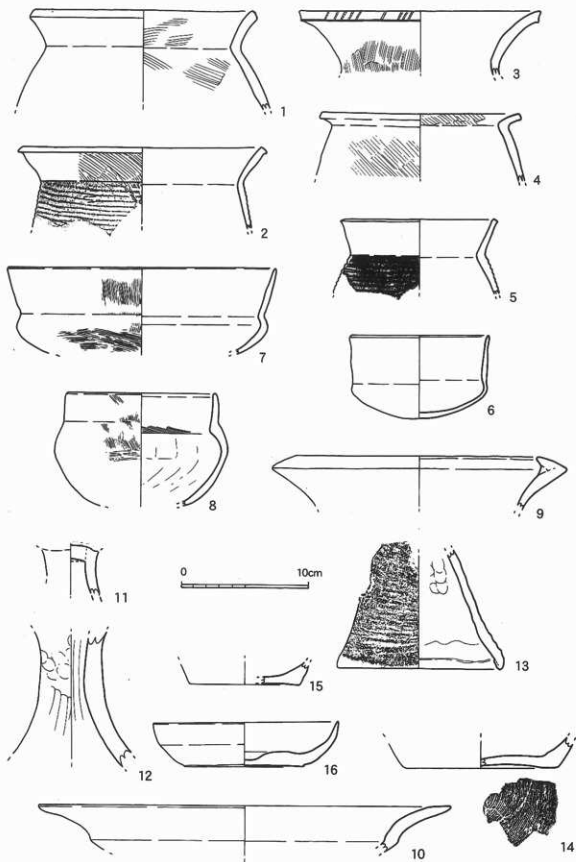
第32図 I区ピット等出土遺物実測図⑤(1/1)

2.Ⅱ区ビット等（付図 Ⅱ区遺構配置図）

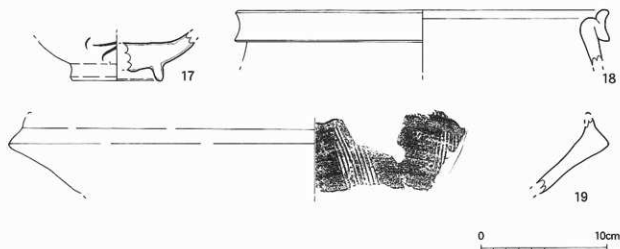
Ⅱ区は、調査区の中では最も遺構密度が高いといえる。中程には多くのビットが検出され、切り合いが複雑であったことから遺構の性格がつかみにくい。Ⅲ区に近づくにつれて弥生時代の遺物が多くなる。

出土遺物（第33図～第37図）

1～6・9～13は弥生土器である。1は甕の口縁部片で、「く」字状口縁の口唇部は平坦面をもつ。復元口径17.2cmを測り、色調は外面がにぶい茶褐色、内面が淡黄褐色を呈する。胎土は1mm程度の砂粒・角閃石を大量に含み、石英・雲母が微量混じる。焼成は良好である。調整は内面の大部分にハケメがみられ、胴部割れ口付近にはナデが確認できる。外面は口縁部にナデ調整が認められるが、胴部は磨耗により調整不明である。2は甕の口縁部で、「く」字状口縁を呈する。口唇部は平坦面をもち、先端を僅かにつまみ出す。復元口径18.8cmを測り、色調は外面がにぶい橙色、内面が明黄褐色を呈する。胎土は1mm程度の白色砂粒を多量含み、石英・長石が少量、角閃石と雲母が微量混じる。内面の調整は磨耗により詳細不明だが、外面口縁部付近にはハケメ、頸部はナデ調整で仕上げる。屈曲部以下には約5cm幅のタタキ目が付されている。3は同じく甕の口縁部だが、口唇部に型押しがなされている。頸部から口縁部にかけて弧を描きながら大きく外反し、外面はハケメ、内面はナデ調整で仕上げる。復元口径は19.0cmを測り、色調は淡黄褐色を呈する。1mm程度の灰色及び黒色砂粒を多く含んでいる。焼成は良好である。4は甕の口縁部であるが、1～3に比べると口縁は短くL字状に外反させ、口唇部は四角くおさめる。復元口径15.6cmを測り、色調は淡褐色を呈する。1mm以下の赤色・灰色・黒色砂粒を多く含み、焼成は良好。口縁部内面及び胴部外面にハケメ調整がみられ、胴部内面と口縁部外面はナデ調整がなされている。胴部外面の一部に黒斑をもつ。口縁部の5分の1のみ現存している。5は甕の口縁部である。「く」字状口縁で、直線的に立ち上がる。復元口径11.8cmを測り、色調は淡黄褐色を呈する。胎土は1mm程度の薄茶色の砂粒を多く含み、焼成は良好である。内面は磨耗により調整の判別が不可能だが、外面口縁部付近にはハケメ調整、胴部には約4.5cm～5cm幅のタタキ目が施されている。9は袋状壺の口縁部で、屈曲部外面には強い稜が生じている。また屈曲部の内面には粘土を充填している状況が観察される。復元口径は19.0cmを測り、色調は黄褐色を呈する。1～2mmの白色・茶色・黒色砂粒を多量に含み、焼成は良好である。口縁部にナデ調整が見られる他は、磨耗のため調整が観察できない。口縁屈曲部外面に僅かに煤が付着する。10は高坏口縁部の破片で、浅い坏部と口縁部の境には段が形成され、口縁部は弧を描きながら大きく広がる。復元口径32.4cmを測り、色調は橙色を呈する。1mm以下の白色・灰色砂粒を多く含み、焼成は良好である。口縁部はナデ調整で仕上げる。11は高坏の脚部接合部片である。円筒状の脚部に坏部との接合部へ粘土を充填したつくりが観察できる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土中に1～2mmの白色及び灰色砂粒を大量に含む。焼成は良好である。12は高坏の脚部である。色調はにぶい淡橙色を呈し、胎土は1～2mmの白色・黒色砂粒を中量、石英・角閃石を微量含有する。焼成は良好で硬質。調整は外面上部に指押さえ後ナデ調整がなされている。内面には連続した指痕がみられ、その下には明確な絞り痕が残る。外面下部はヘラケズリ調整で面を作っている。13は支脚であり、脚部の3分の2ほど現存する。復元底部径は12.8cmを測り、



第33図 II区ビット等出土遺物実測図①(1/3)

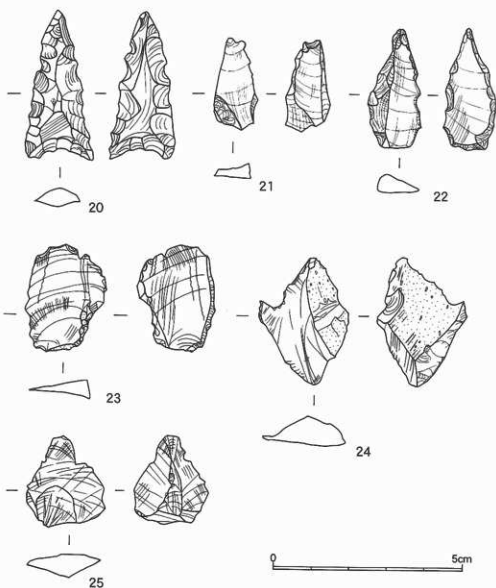


第34図 II区ピット等出土遺物実測図②(1/3)

色調は内外面ともに淡黄褐色を呈する。1mm以下の茶色・灰色・黒色砂粒を大量に含み、焼成は良好である。磨耗により見えにくいものの、外面には約5cm幅のタタキが施されている。脚端部は、内側に折り込んで肥厚させる。また内面上部には連続した指痕が認められる。

6～8は古墳時代の土師器。6と7は小形丸底壺の系譜を引くものであろう。6は口径10.8cm、器高6.5cmを測る。口縁部はほぼ直立し、頸部の屈曲は弱い。色調は黄褐色を呈し、1mm程度の細砂粒を多量含む。焼成は良好である。外面底部の広範囲に黒斑を有する。外面はナデ調整、内面には数箇所にハケメがみられ、内面底部には指痕が確認できる。口縁部を一部欠損している。7は2分の1を欠損する。口縁部は長く直線的に立ち上がり、やや外に広がる。頸部の屈曲部から扁球形に広がる体部をもつ。復元口径は21.0cmを測り、色調は濃橙色を呈する。胎土中には白色・灰色の1mm程度の砂粒と石英を中量、角閃石を微量含み、焼成はやや良好で、やや軟質。口縁部と体部に目の細かい縦ハケメ調整が見られ、体部はさらに横方向のミガキを加える。屈曲部は内外面ともナデ仕上げである。8は直口壺で、底部及び体部の3分の1を欠損する。口縁部はほぼ直立し、頸部の屈曲は多少みられる。口径は11.6cm、現存器高8.9cmを測り、色調は内外面ともに橙褐色を呈する。1mm程度の黒色砂粒を中量、雲母・角閃石を微量含み、焼成は良好である。口縁部はナデ調整で仕上げ、内面頸部及び外面頸部下は目の細かいハケメ調整がなされる。体部内面は幅の広いヘラケズリで面を作り、外面は口縁部から頸部にかけて黒斑を有する。

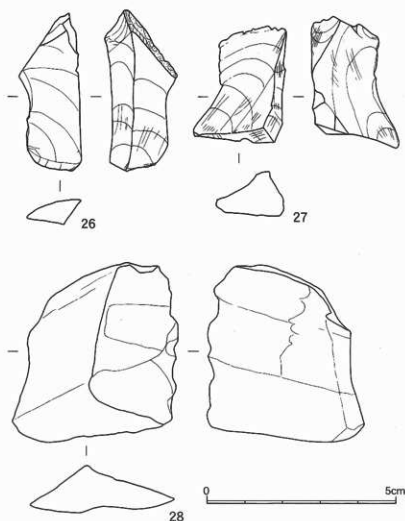
14～16は中世に属する土師器である。14は土師器の皿である。5分の1ほど現存しており、復元底径11.8cmを測る。色調は外面が赤みがかった淡黒灰色、内面が赤褐色を呈する。胎土は1mm以下の赤色及び黒色細砂粒を少量、石英・角閃石・長石を微量含有し、焼成は良好である。外面にはいぶしがみられ、底部には明瞭な糸切り痕が残る。内面はナデ調整で仕上げる。やや上げ底を呈する。15は同じく皿であり、5分の1現存する。復元底径8.6cmを測り、色調は淡橙色を呈する。胎土は1mm以下の赤色砂粒を少量まじり、焼成は良好だが、やや軟質。調整は底部に糸切り痕がみられ、それ以外はナデ調整で仕上げる。16は口縁部を僅かに欠損する土師器の坏であり、口径14.5cm、底径9.3cm、器高3.5cmを



第35図 II区ビット等出土遺物実測図③(1/1)

測る。色調は淡橙色を呈し、胎土は1~2mmの赤色砂粒を中量含む。焼成は良好である。調整は底部に糸切り痕がみられ、外面は回転ナデ調整、内面はナデ調整で仕上げる。底部はナデのため肥厚している。

17は青磁の椀で、龍泉窯系Ⅲ類であろうか。復元底径7.0cm、現存器高3.8cmを測り、色調は胎土が灰白色を呈する。釉調は青みがかった暗緑色を呈し、高台内部と疊付は軸掻き取りがなされる。施釉部と露胎の境目の部分は明茶褐色である。高台接合部の削り込みがかなり鋭角で、全体に目の大きい貫入が入っている。胎土は精良で焼成は良好。底部に薄茶色の胎土付着部があり、焼成時に付着したものと考えられる。18は陶器の甕で、口縁部の8分の1のみ現存している。「N」字状に口縁端部を屈曲させて口縁帯をつくる形態から常滑焼と判断される。調整は全面に回転ナデが施され、屈曲部をヘラのようなもので撫でて整えている。復元口径29.0cmを測り、胎土は精良である。多少焼きがあまく、赤味がか

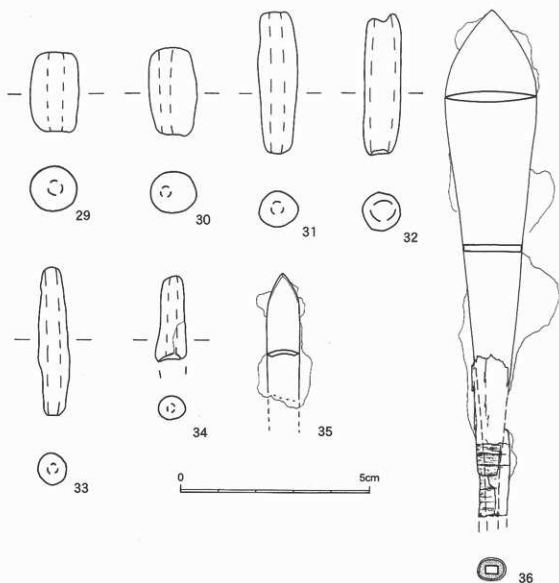


第36図 II区ビット等出土遺物実測図④(1/1)

った灰褐色を呈する。19は陶器の摺鉢であり、口縁部から体部の一部のみ現存している。色調は外面が淡赤褐色、内面がにぶい暗赤褐色を呈し、胎土は1~2mmの赤色砂粒を中量含む。焼成は良好である。調整は内外面に回転ナデ調整、粗い作りをしている。摺目は8条1組で底部から口縁部へ向かい、約5cmの間隔で刻まれる。20~28は黒曜石及びサヌカイトで、観察表（第3表）を参照。29~34は土錘で、観察表（第2表）を参照。35・36は鉄製品で、観察表（第4表）を参照されたい。

3.Ⅲ区ビット等（付図 Ⅲ区遺構配置図）

Ⅲ区は調査区のある丘陵から西側平野を眺める場所であるが、ここは弥生時代の遺構が多く検出された。ビットもある程度検出できたが、ゆるやかな斜面になっているため、流れ込みや攪乱が多く時代や性質の判別が困難であった。掘立柱建物の存在も検討したが、調査区幅が狭いため、ほとんど確認できなかった。



第37図 II区ビット等出土遺物実測図⑤(1/1)

4号溝 (付図 III区遺構配置図)

III区西側斜面の頂上付近から南北に延びる溝状遺構である。幅0.44m、長さ12.2mを測る細長い遺構で、深いところで10cmの深さである。南端は調査区の境界にぶつかっており、ここからさらに南に延びる可能性もある。中程で西へ派生し土壌とぶつかっている。溝の床面からビットが検出されたが、溝ともども遺物は出土していない。

5号溝 (付図 III区遺構配置図)

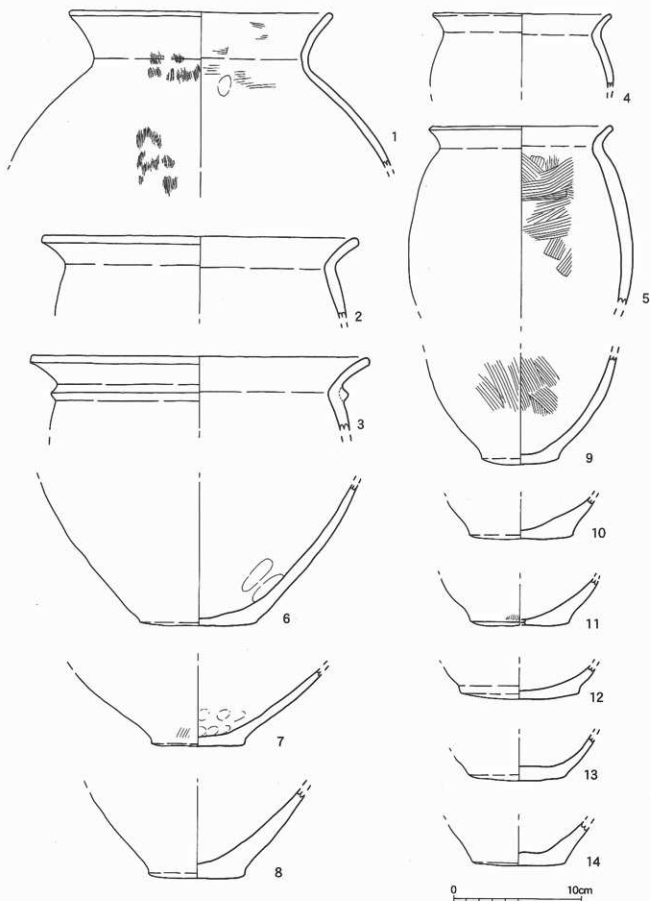
III区に位置し、調査区と平行して南北に延びる溝状遺構である。幅は約0.44mで4号溝とほぼ同じであり、長さは3.62mと4号溝に比べると短い、4号溝の延長線上に延びる。床面には小規模なビットが数箇所検出された。遺物はサヌカイトが2点出土している。しかし検出状況から考察すると、攪乱である可能性が高い。

6号溝（付図 Ⅲ区遺構配置図）

Ⅲ区に位置し、5号溝からわずか0.06m北から延長線上に北へと延びる。幅は4号溝、5号溝よりわずかに広い0.6m程度である。16m北に延びたところで1号竪穴住居跡に到達し、そこから竪穴住居跡に沿って北へ3.8m、さらに住居跡に沿って東へ3.4mを測る。深さは3～8cm程で、1号竪穴住居跡より新しい。遺物は弥生土器片が少量あり、陶磁器片も出土していることから、攪乱であろう。

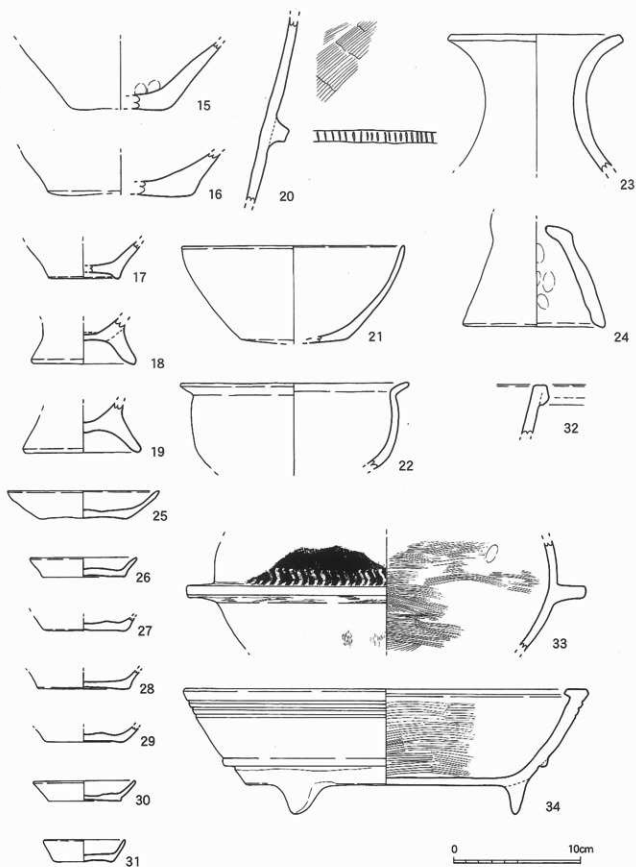
出土遺物（第38図～第41図）

1～24は弥生土器である。そのうち6・11・16・20・23・24はⅢ区西端斜面からの出土であり、上からの流入ではないかと思われる。1は「ハ」字状に開く長い口縁部を有する甕であり、口縁部から体部の一部のみ現存する。復元口径は20.4cmを測り、色調は外面が黄褐色、内面が淡橙色を呈する。胎土は1～2mmの砂粒を大量に含有し、焼成は良好である。体部外面のハケメは目が細かく、また磨耗のため観察しえない部分がある。口縁部内面には僅かなハケメ、頸部やや下に指痕が認められる。2は「く」字状口縁を有する甕の口縁部片であり、復元口径24.6cmを測る。色調は口縁部が黄褐色、胴部が橙色を呈し、1～3mmの粗い砂粒を大量に含む。口縁部にナデ調整がなされているが、胴部の調整は磨耗により不明である。3は甕で口縁部の一部のみ現存している。「く」字状口縁をなし、頸部の屈曲部に三角突帯が1条貼り付けられる。口唇部は平坦面をもつ。復元口径は26.4cmを測り、色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は1mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。突帯付近にはナデ調整がなされている。それ以外は磨耗により調整不明である。4は2・3に比べれば小ぶりの甕で、口縁部の一部以外は欠損している。頸部から口縁部までは短く、頸部の屈曲部はゆるやかで角を作らない。復元口径14.0cmを測り、色調は外面が明黄褐色、内面が橙色～淡茶褐色を呈する。胎土は5mmの小石が一粒混在し、1mm程度の白色及び灰色砂粒を中量含む。焼成は良好である。頸部は内外面をナデ調整で仕上げる。5は甕で、頸部から胴部にかけて現存する。復元頸部径14.0cmを測り、色調は外面が橙褐色、内面が灰褐色を呈する。胎土は1～3mmの粗い砂粒を大量に含み、焼成は良好である。調整は内面にハケメがみられるが、粗い。外面は磨耗により調整不明である。6は甕の底部で、復元底径9.2cm、現存器高11.1cmを測る。底部はややレンズ状である。色調は濃黄褐色を呈し、胎土は1～2mmの灰色砂粒を主に含有する。焼成は良好である。調整は内面底部やや上に指痕が認められるのみである。7は壺の底部片で、底径7.4cm、現存器高6.2cmを測る。色調は外面が濃黄褐色、内面が灰褐色を呈する。胎土は5mm程度の小石が微量混在し、焼成は良好である。調整は内面底部付近に指痕が認められ、外面底部付近には黒斑をもつ。8は甕の底部で、底径7.7cm、現存器高6.6cmを測る。色調は外面が橙色、内面が淡茶褐色を呈し、胎土は5mm程度の小石が2粒、1～3mmの砂粒を大量に含む。焼成は良好である。激しい磨耗により調整は不明である。9は甕で、底部から胴部にかけて現存している。底径6.1cm、現存器高8.6cmを測り、色調は淡黄褐色を呈する。胎土は1～2mmの白色・灰色・茶色砂粒を大量に含み、焼成は良好である。内外面の胴部には一部ハケメ調整がみられ、それ以外の部分は激しい磨耗により調整不明である。胴部外面には黒斑をもつ。10は甕の底部で、底径8.2cm、現存器高3.3cmを測る。色調は黄褐色を呈し、胎土は1mm以下の砂粒を少量、5mmの小石を微量含む。焼成は良好である。調整は外面胴部及び底部をナデ調整で仕上げる。11は甕の底部で、復元底径7.8cm、現存器高



第38図 Ⅲ区ビット等出土遺物実測図①(1/3)

3.7cmを測る。底部2分の1のみ現存する。色調は外面が黒灰色、内面が濃黄褐色を呈し、胎土は石英・角閃石を微量含有する。焼成は良好である。調整は不明。外面の黒灰色部分は黒斑であろうか。12は甕の底部で、底径9.2cmを測る。レンズ状の底部である。色調は外面が橙色、内面が濃黄褐色を呈し、胎土は5~7mmの小石が微量混じり、1~3mmの白色・灰色・茶色砂粒を多く含む。焼成は良好である。調整は磨耗により不明。13は甕の底部で、底径は7.6cmを測る。レンズ状の底部で、底部内面はやや肥厚する。色調は外面が橙色、内面が濃黄褐色を呈する。1~2mmの砂粒を大量に含み、焼成は良好である。外面の一部にナデ調整がみられるが、内外面の磨耗が激しく、調整不明である。底部のみ現存している。14は甕の底部である。内面底部中央はやや肥厚する。復元底径7.2cmを測り、外面はにぶい茶褐色、内面と外面底部は黄褐色を呈する。胎土は1~2mmの砂粒を多く含み、石英中量、角閃石・雲母が微量混在し、焼成は良好である。外面にナデ調整がみられる他は磨耗により調整不明である。15は甕の底部で、復元底径7.8cmを測る。色調は外面がにぶい黄褐色、内面が明橙褐色を呈し、胎土は1mm程度の砂粒を中量、石英と雲母を少量含有する。焼成は良好である。内面底部に指痕がみられ、外面底部には黒斑を有する。底部の3分の1のみ現存している。16は甕の底部で、復元底径11.6cmと比較的大きい。現存器高3.3cmを測り、色調は外面が黄褐色、内面が淡橙色を呈する。胎土は1~2mmの赤茶色・灰色・黒色砂粒を含み、焼成は良好である。内外面にナデ調整がみられ、底部の2分の1以外は欠損している。17は甕の底部で、復元底径5.4cmを測る。底部は高さ5mmの高台状となる。色調は外面がにぶい赤褐色、底部は暗茶褐色、内面が橙色を呈し、胎土は1mm程度の灰色・黒色砂粒を大量に含む。焼成は良好であり、台部分はナデ調整で仕上げる。割れ口付近の胴部には黒斑がみられ、底部はいぶしされたように変色する。18は台付き甕の脚台部で、脚台底径8.0cm、現存器高3.6cmを測る。「ハ」字状に開く脚台は接地面より約2cm甕の底部を持ち上げる。色調はにぶい橙褐色を呈し、胎土は1~2mmの砂粒を中量含む。焼成は良好である。脚台内部の接合面はナデで調整しており、それ以外は磨耗により調整不明である。脚台部のみ現存する。19は同じく台付き甕の脚台部である。18よりやや広く「ハ」字状に開く。脚台部のみ現存しており、脚台底径9.2cm、現存器高3.9cmを測る。色調は外面が濃褐色と濃黄褐色が混じり、内面は淡黄褐色を呈する。胎土は1~3mmの粗い砂粒を大量に含み、焼成はやや良好で、土器表面が若干脆い。脚台内面の一部にナデ調整がある他は、磨耗により調整不明である。20は甕の胴部で、「コ」字状突帯が一条巡る。貼り付け突帯には等間隔に刻み目が入り、胴部と剥離した状態で出土した。色調は外面が淡橙色、突帯が黄橙色、内面が濃橙色を呈し、胎土は1~2mmの砂粒を大量に含有する。焼成は良好である。21は鉢で、約3分の1のみ現存する。復元口径17.4cm、現存器高7.6cmを測り、色調は外面がにぶい黄褐色、内面が淡黄褐色を呈する。胎土は1mm程度の砂粒を大量に含み、石英・角閃石中量、雲母少量も混じる。焼成は良好である。外面はナデ調整で仕上げ、内外面に黒斑を有する。22は鉢であろうか。頸部は屈曲し、口縁部は短く外に開く。口唇部は丸く、ナデで仕上げる。復元口径17.6cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。胎土は1mm程度の砂粒を多量に含んでおり、石英・雲母が少量混じる。焼成は良好である。内面はナデ調整で仕上げ、口縁部外面の広範囲に黒斑を有する。23はゆるやかなくびれ部をもつ器台で、復元受部径13.4cm、現存器高10.8cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は1~2mm程度の砂粒が多く含まれ粗い作りになっている。

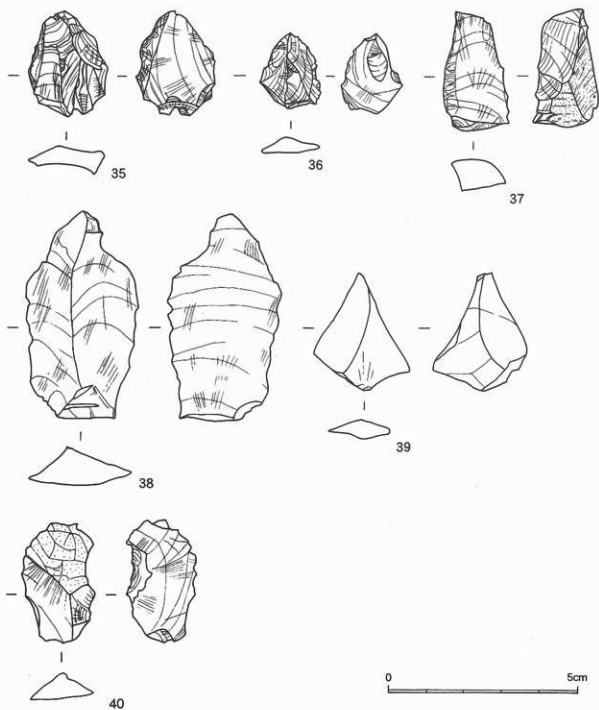


第39図 III区ピット等出土遺物実測図②(1/3)

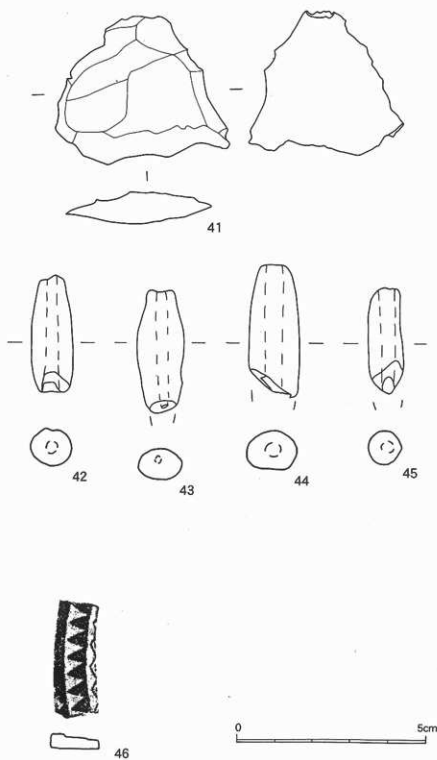
調整は磨耗により不明である。24は支脚で、復元底部径11.0cm、現存器高8.9cmを測る。天井部には孔を穿ち、水平より斜めになると思われる。色調は外面が淡黄褐色、内面が淡黄灰色を呈し、胎土は1mm程度の薄茶及び灰色砂粒を大量に含有する。焼成はやや良好である。調整は内面に指痕がみられる。天井部の先端を欠損し、2分の1現存する。

25～31は土師器の皿である。25は復元口径12.0cmを測る。色調は明淡橙色を呈し、胎土は1mm程度の赤色砂粒を中量、透石・長石・角閃石微々量を含有する。焼成は良好であるが、やや軟質。調整は口縁部付近がナデ調整、底部切り離しは糸切りで、僅かに上げ底となっている。26は皿で口縁部3分の1のみ現存する。僅かに上げ底の底部をもつ。復元口径8.4cm、器高1.6cmを測り、色調は淡灰褐色を呈する。胎土は1mm程度の黒色砂粒を中量、角閃石・長石を少量含有し、焼成は良好である。調整は底部に糸切り痕が認められるのみである。27は同じく皿であり、底部のみ現存している。底部はナデにより肥厚する部分がある。底径6.4cmを測り、色調は灰白色を呈する。胎土は1mm以下の砂粒を中量含有、透石・石英・角閃石を微量含み、焼成は良好である。底部に糸切り痕がみられ、外面にはナデ調整が確認できる。外面底部及び内面の広範囲にわたって黒斑を有する。28は皿であり、口縁部を欠損する。底部は僅かに上げ底である。底径は7.0cmを測り、色調は淡橙色を呈する。胎土は1mm以下の赤色砂粒を中量、微細な角閃石を少量含み、焼成は良好。底部に糸切り痕がみられる他は磨耗により調整不明である。29は皿で底部6分の1を欠損する。底径は5.4cmを測り、色調は淡黄灰色を呈する。胎土は1mm以下の黒色砂粒、石英を含み、焼成は良好である。内面底部を指ナデ、それ以外の面は磨耗により調整不明である。30は小皿で、口縁部4分の1を欠損している。口径7.9cm、底径5.6cm、器高1.6cmを測り、色調は橙色を呈する。胎土は精良で、焼成は良好である。底部に糸切り痕がみられ、それ以外はナデ調整で仕上げる。31は小皿であり、口径6.3cm、底径4.2cm、器高1.7cmを測る。口縁部を僅かに欠損する他は完形に近い。色調は黄橙色を呈し、胎土は薄赤色砂粒微量、角閃石・透石微量、1mm以上の雲母を少量含む。焼成は良好である。右回りのロクロで、底部切り離しは糸切りである。底部に1箇所、指で押さえたような痕がある。底部以外はナデ調整で仕上げる。

32は鉢の口縁部小片である。色調は外面が濃茶色、内面は淡橙色を呈し、胎土は1mm程度の赤色砂粒を中量含む。焼成は良好である。玉縁状の口縁部は粘土を折り曲げ肥厚させたのか、貼り付けかは判断しえない。33は羽釜であり、復元最大幅は31.6cmを測る。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は1mm程度の白色・薄赤色砂粒・石英を少量含有する。焼成は良好である。羽部上に緩やかなS字型の押し型文がみられ、3条1組となる。羽部の接合部はヘラで整えたのち、押し型文を入れる。内面は全面に目の細かいハケメ調整がなされ、内外面ともにいぶしが付着する。34は瓦質の鉢である。火鉢であろうか。復元口径は31.6cm、器高は9.9cmを測り、色調は外面が淡橙色、内面が灰褐色を呈する。胎土は1mm程度の赤色砂粒を多量に含み、角閃石を微々量含有する。焼成は良好である。内面は何重ものハケメ調整で仕上げ、外面はナデ調整である。口縁端部は内側に短く突出させ、外面には直下に3条の沈線を巡らせる。体部中位下の三角突帯は貼り付けによるもので、接合部にはヘラによる調整痕がみられる。逆台形の脚をおそらく3箇所に有したものである。外面には黒斑をもつ。35～41は黒曜石及びサヌカイトで、観察表（第3表）参照。42～45は土錘で、観察表（第2表）を参照されたい。



第40図 Ⅲ区ビット等出土遺物実測図③(1/1)



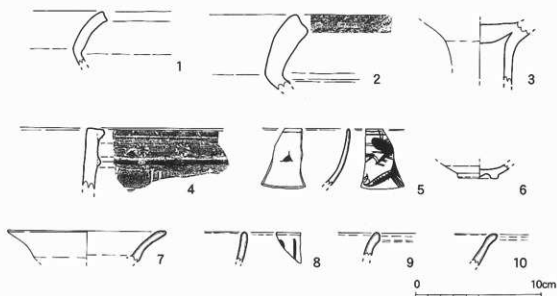
第41図 III区ビット等出土遺物実測図④(1/1)

46は後漢鏡の破片である。外区の文様帯の破片で、最外円には三角文が並んでいることから方角規矩鏡である。穿孔はみられず、断面は磨き上げているように滑らかである。この銅鏡片が出土した遺構は深さ30cmの土壌であり、西側端から発見された。付近の遺構からは銅鏡片はみられないため、銅鏡としてこの集落にあったのではなく、集落の長に賜下された可能性もある。ただ、調査範囲が細長く十分な調査ができていないため、調査区を除く周辺に残存破片がある可能性も否定できない。

4. 包含層等出土遺物（第42図、第43図）

包含層からは弥生土器片、陶磁器片の出土がほとんどであった。1～3は弥生土器である。1は弥生土器の甕の口縁部であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は1mm以下の茶色・黒色砂粒を大量に含み、焼成は良好である。口縁部はナデ調整で仕上げ、口唇部は平坦面をもつ。内面は砂粒により多少粗いが、外面は滑らかに整えられている。2は同じく甕の口縁部であり、復元口径33.4cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は1～2mmの砂粒を大量に含む。焼成は良好である。口唇部には刺突文を配し、口縁部はかなり肥厚している。調整は表面の磨耗により不明である。3は高坏の坏部と脚部の接合部付近で、坏部に円筒状の脚部が続く。色調は外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は1mmの長石、砂粒を大量に含む。焼成は良好である。

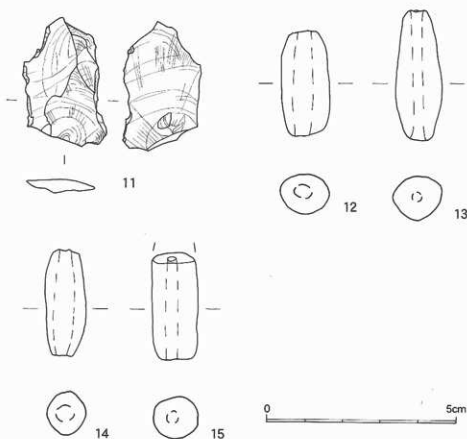
4は瓦質の鉢の口縁部である。最大厚み1.5cmを測り、色調は黒褐色で一部にぶい明褐色を呈する。胎土は1mm程度の赤色砂粒を少量、角閃石と雲母を微量含み、焼成は良好である。直立する口縁部に、端部とやや下位に突帯を巡らせることによって文様帯をつくり、花文の押型文を連続させる。その文様帯の下には2条1対の縦方向の沈線で装飾するとみられる。外面は回転ナデで仕上げられ、内面はハケメ調整がみられる。全体にいぶしが付着する。5は磁器の碗の破片である。色調は灰白色、釉調は青灰白色を呈する。胎土は精良



第42図 包含層等出土遺物実測図①(1/3)

で、焼成は良好。染付けであり、絵の部分の青色が薄く、輪郭も明確ではない。主に外面施釉だが、内面にもごく薄く釉がかかる。6は陶器の皿か碗の底部であり、底径3.0cmを測る。色調はにぶい橙色、釉調は灰白色を呈する。胎土は1mm以下の砂粒を中量含み、焼成は良好である。内面全体に施釉され、外面は高台内部及び高台周辺は露胎であるが、外面割れ目付近には釉がみられるため、施釉後高台周辺を釉掻き取りか。高台径は非常に小さい。内面には目の細かい貫入が入っている。

7~10は青磁である。7は皿の小片であり、復元口径12.4cmを測り、色調は浅黄色、釉調は明青緑色を呈する。胎土は精良で、焼成は良好である。全面に施釉され、内面にやや目の粗い貫入が入る。8は碗の口縁部小片である。色調は灰白色で、釉調は暗緑灰色を呈する。胎土は精良で、焼成は良好である。全面に施釉され、外面にヘラによる文様がみられる。9も碗の口縁部小片で端部は短く外反させる。色調は灰白色で、釉調は黄みがかった淡緑灰色を呈する。胎土は精良で、焼成は良好である。全面に施釉され、目の細かい貫入が入る。10は内湾する体部に短く外反する口縁部が続く碗の小片。色調は明褐灰色で、釉調は黄みがかった淡緑灰色を呈する。胎土は精良だが僅かに微細な砂粒が混じる。焼成は良好である。全面に施釉され、内外面に目の大きい貫入が入る。11は黒曜石で、観察表(第3表)を参照。12~15は土錘で、観察表(第2表)を参照されたい。



第43図 包含層等出土遺物実測図②(1/1)

第1表 土鍾觀察表①

掲載図	出土遺構	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
第22図 1	5号土壌	4.4+	1.4	0.3	8.7	一端欠損
第22図 2	5号土壌	3.6	1.3	0.4	4.4	完形
第22図 3	5号土壌	3.3	1.2	0.5	3.6	完形
第22図 4	5号土壌	4.2	0.9	0.2	2.4	完形
第22図 5	5号土壌	4.4	0.9	0.2	2.1	一端磨減
第22図 6	5号土壌	3.5+	0.7	0.4	1.0	一端欠損
第22図 7	5号土壌	4.3+	0.9	0.4	2.7	両端磨減
第22図 8	5号土壌	4.3	1.0	0.3	2.3	完形
第22図 9	5号土壌	4.7+	0.9	0.2	2.1	両端欠損
第22図 10	5号土壌	4.1	0.8	0.3	1.8	完形
第22図 11	5号土壌	4.1	1.0	0.2	2.1	両端磨減
第22図 12	5号土壌	3.3	1.0	0.2	1.8	完形
第22図 13	5号土壌	3.7	0.8	0.2	1.4	一端磨減
第22図 14	5号土壌	3.8	0.8	0.3	1.5	一端欠損
第22図 15	5号土壌	3.7+	1.0	0.3	1.6	両端欠損
第23図 16	5号土壌	4.3	0.8	0.4	2.6	完形
第23図 17	5号土壌	3.8	0.8	0.3	1.9	完形
第23図 18	5号土壌	3.7	0.9	0.2	2.0	完形
第23図 19	5号土壌	4.0+	1.0	0.2	2.5	両端欠損
第23図 20	5号土壌	3.9+	0.8	0.3	2.2	一端欠損
第23図 21	5号土壌	3.5+	1.0	0.3	2.2	一端欠損
第23図 22	5号土壌	2.9+	0.8	0.3	1.4	一端磨減
第23図 23	5号土壌	2.0+	0.7	0.2	0.7	一端欠損
第23図 24	5号土壌	2.3+	0.9	0.4	1.0	両端欠損
第23図 25	5号土壌	2.3+	0.9	0.3	1.2	両端欠損
第23図 26	5号土壌	2.2+	0.6	0.2	0.7	両端欠損
第26図 1	6号土壌	3.4	1.0	0.3	2.4	完形
第26図 2	6号土壌	3.4	1.0	0.2	1.9	完形
第26図 3	6号土壌	2.8	1.4	0.2	3.7	完形
第26図 4	6号土壌	2.8	1.4	0.4	5.2	完形
第26図 5	6号土壌	3.1	1.4	0.4	5.9	完形
第26図 6	6号土壌	3.7+	0.8	0.2	2.1	一端欠損
第26図 7	6号土壌	2.9+	1.0	0.2	1.9	両端欠損
第26図 8	6号土壌	4.8+	1.0	0.3	2.4	両端欠損
第30図 27	I区土壌	2.5+	1.0	0.3	1.7	一端欠損
第30図 28	I区土壌	3.0	0.8	0.2	1.7	完形
第30図 29	I区土壌	4.0	1.1	0.2	2.6	一端磨減
第30図 30	I区土壌	2.1+	1.2	0.2	2.4	一端欠損
第30図 31	I区ビット	2.4+	0.7	0.3	1.4	一端欠損
第30図 32	I区ビット	2.5	1.0	0.4	3.2	完形
第30図 33	I区ビット	3.2+	0.9	0.2	2.1	両端欠損
第30図 34	I区ビット	3.5	1.1	0.2	4.3	完形
第30図 35	I区ビット	3.5	1.0	0.3	4.1	完形
第30図 36	I区ビット	3.0	1.5	0.3	3.8	完形
第30図 37	I区ビット	3.9+	1.1	0.3	3.7	一端欠損
第30図 38	I区ビット	2.6+	1.2	0.3	4.2	一端欠損
第30図 39	I区ビット	2.7+	0.6	0.3	1.0	一端欠損
第30図 40	I区ビット	3.2	0.9	0.2	2.4	完形
第30図 41	I区ビット	2.0+	0.7	0.2	1.2	一端欠損
第30図 42	I区ビット	3.3+	0.9	0.2	3.2	一端欠損
第30図 43	I区ビット	4.3	1.0	0.3	2.8	一端磨減
第30図 44	I区ビット	3.5	1.1	0.2	3.8	完形
第31図 45	I区ビット	3.3	1.4	0.3	5.6	完形
第31図 46	I区ビット	2.6+	0.9	0.2	1.3	両端欠損
第31図 47	I区ビット	3.6	1.0	0.2	2.4	完形

第2表 土鍾観察表②

掲載図	出土遺構	長さ(cm)	最大径(cm)	孔 径(cm)	重 量(g)	備 考
第31図 48	I 区ビット	4.0	1.0	0.2	3.7	一端磨減
第31図 49	I 区ビット	4.0	0.9	0.3	2.4	完 形
第31図 50	I 区ビット	4.0	1.0	0.3	4.2	完 形
第31図 51	I 区ビット	2.5	1.1	0.3	3.5	完 形
第31図 52	2号溝	4.4	0.8	0.2	2.6	完 形
第31図 53	2号溝	4.0	0.9	0.3	2.7	完 形
第31図 54	2号溝	3.4	1.0	0.2	3.3	完 形
第31図 55	2号溝	3.7	0.9	0.3	2.5	完 形
第31図 56	2号溝	2.8+	1.6	0.6	6.1	一端欠損
第31図 57	2号溝	4.0+	0.8	0.3	2.2	一端欠損
第36図 29	II 区土壌	2.1	1.2	0.3	3.2	完 形
第36図 30	包含層	2.3	1.3	0.3	3.2	完 形
第36図 31	II 区ビット	3.8	1.0	0.2	3.6	完 形
第36図 32	II 区ビット	3.5	0.9	0.5	3.9	完 形
第36図 33	II 区ビット	3.9	0.8	0.3	2.1	完 形
第36図 34	II 区土壌	2.3+	0.7	0.3	1.0	一端欠損
第40図 42	III 区土壌	3.1	1.1	0.3	2.5	完 形
第40図 43	III 区土壌	3.2+	1.2	0.2	3.1	一端欠損
第40図 44	III 区土壌	3.5+	1.4	0.4	4.2	一端欠損
第40図 45	III 区ビット	2.7+	0.9	0.4	1.7	一端欠損
第42図 12	包含層	2.8	1.3	0.4	4.9	完 形
第42図 13	包含層	3.3	1.2	0.4	4.6	完 形
第42図 14	包含層	2.7	1.1	0.3	3.1	完 形
第42図 15	包含層	2.8+	1.2	0.2	4.1	一端欠損

第3表 黒曜石・サヌカイト観察表

掲載図	出土遺構	石 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
第30図 20	I 区土壌	黒曜石	2.3	1.3	0.5	1.7	
第30図 21	I 区土壌	黒曜石	2.1	1.4	0.8	2.2	
第30図 22	I 区ビット	黒曜石	4.4	1.7	0.6	5.6	
第30図 23	I 区ビット	黒曜石	3.1	2.4	0.8	6.6	
第30図 24	2号溝	黒曜石	2.5	1.5	0.2	1.5	
第30図 25	2号溝	黒曜石	2.7	0.9	0.4	1.4	
第30図 26	I 区ビット	サヌカイト	4.1	1.3	4.3	26.4	
第35図 20	II 区ビット	黒曜石	3.7	1.3	0.5	3.0	石 鑑
第35図 21	II 区土壌	黒曜石	2.2	1.0	2.5	0.8	
第35図 22	II 区土壌	黒曜石	3.1	1.3	0.5	2.0	
第35図 23	II 区土壌	黒曜石	2.7	1.5	2.5	2.3	
第35図 24	II 区土壌	サヌカイト	3.3	2.0	0.7	5.2	
第35図 25	II 区ビット	黒曜石	2.3	2.0	0.6	1.8	
第36図 26	II 区ビット	サヌカイト	4.1	1.3	0.6	4.6	
第36図 27	II 区ビット	サヌカイト	3.0	1.7	1.1	8.0	
第36図 28	II 区ビット	サヌカイト	4.4	1.1	3.8	23.5	
第40図 35	III 区ビット	黒曜石	2.7	2.0	0.5	2.9	
第40図 36	III 区ビット	黒曜石	2.0	1.6	4.0	1.2	
第40図 37	2号竪穴住居	サヌカイト	3.0	1.6	0.8	5.7	
第40図 38	5号溝	サヌカイト	5.5	2.8	1.0	12.4	
第40図 39	5号溝	サヌカイト	3.6	2.2	0.5	2.8	
第40図 40	II 区ビット	サヌカイト	3.1	1.5	0.8	4.0	
第41図 41	III 区ビット	サヌカイト	3.6	3.8	0.8	10.0	
第43図 11	表探	黒曜石	3.2	1.8	0.3	3.8	

第4表 鉄製品観察表

掲載図	出土遺構	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考
第37図 35	II 区土壌	鉋	3.5+	0.9	0.1	4.2	
第37図 36	II 区土壌	鉄砲	13.3+	2.4	0.3	54	

IV 自然科学的考察

幾野々原遺跡出土の赤色顔料

九州国立博物館博物館科学課 志賀智史

1.調査資料

調査資料は福岡県八女郡立花町大字北山4981-1外に所在する幾野々原遺跡の1号甕棺から出土した赤色顔料である。遺構の時期は弥生時代後期と考えられている。

2.調査方法

目視と顕微鏡観察

調査は目視で全体を把握しながら、適宜実体顕微鏡を用い7~100倍の倍率で資料を直接観察した。赤色物だけでなく土壌をも考慮しながら、赤色物の遺存状態を観察した。資料中の赤色顔料ではないかと思われる粒子を金属製の針を用いて直接サンプリングし、複数枚のプレパラートを作成した。このプレパラートを生物顕微鏡を用い、斜光と透過光により、50~1000倍の倍率で観察した。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素を知るために蛍光X線分析を行った。測定にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置(堀場製作所製XGT5000、電圧50KV、照射径100 μ m、時間100秒、真空)を用いた。赤色の由来となる元素として朱は水銀(Hg)、ベンガラは鉄(Fe)が検出される。ただし、土壌にはもともと元素としての鉄(Fe)が含まれているので、その由来を判断するために顔料の状態、顔料粒子の有無を必ず顕微鏡で確認している。

3.出土赤色顔料の現在までの知見

出土赤色顔料は、現在までの調査によって朱とベンガラの二種類が知られている。朱は鉱物である辰砂(HgS)を磨り潰して粉にしたもので、ショッキングピンク色~オレンジ色に見える。この色見の違いは顔料粒子の大きさや関連があると考えられている。粒子は赤く透き通っており、樹脂状の光沢を持つ。蛍光X線分析では水銀(Hg)が検出される。

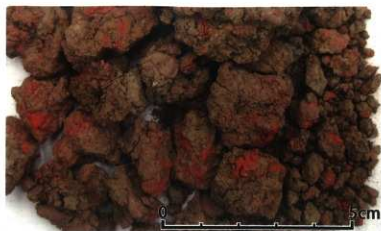
ベンガラは、鉱物としての赤鉄鉱(Fe_2O_3)を粉にして得ることができる。また、褐鉄鉱や磁鉄鉱、磁赤鉄鉱を焼成して赤鉄鉱を作り、これを粉にしても得ることができる。その他、鉄細菌や鉄錆を焼成しても得られることも分かっており、原料は多様であると考えられている。ベンガラは暗赤色や紫色、オレンジ色等多様な色調に見える。この色調の違いは、顔料粒子の大きさや赤鉄鉱中に含まれている微量元素の違いによるものといわれ、粒子の形態とも関連しているものと思われる。特徴的なものとして鉄細菌起源のパイプ状の粒子を含むベンガラがある。蛍光X線分析では鉄(Fe)が検出される。

赤色顔料はそれぞれ特徴を持った外観を有しているので、特に微粒のものが混在していなければ、生物顕微鏡観察までで試料の材質や状態などについては、ほぼ経験的に見極めがつく。

4.調査結果

提供を受けた資料の重量は81g（包含土壌を含む）である。赤色顔料の濃集した部分が多数認められるが（写真1）、実体顕微鏡で確認すると、半透明・透明鉱物が必ず含まれており、埋没過程の中で土壌と混在した状況が伺える（写真2）。

赤色顔料の種類については、目視と顕微鏡観察によって朱特有の粒子を認めた（写真3）。蛍光X線分析では赤色に由来する元素として水銀(Hg)を検出した（写真4）。その他鉄(Fe)も検出したが、ピークはかなり低くペンガラ凝集部分や粒子も認められなかったため、土壌に由来するものであろう。したがって赤色顔料の種類は朱と考えられる。



◀写真1

分析資料の状態（実大）。土壌の中に赤色顔料の濃集した部分が認められる。調査の結果、赤色顔料の種類は朱であることが判った。写真は資料を直接撮影したもの。

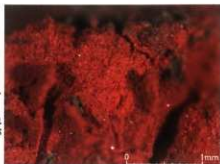


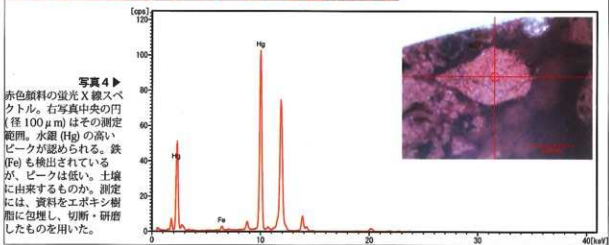
写真2▶

赤色顔料濃集部分の顕微鏡写真（20倍）。濃集部分には半透明・透明鉱物も認められるため、埋蔵過程で土壌と混在した様子が伺える。写真は資料を直接撮影したもの。



◀写真3

赤色顔料粒子の顕微鏡写真（300倍）。主に直径 $30\mu\text{m}$ 以下の大きさの粒子で構成されている。これより大きい粒子も少数認められ、最大 $400\mu\text{m}$ の粒子も確認できた。写真は、資料の赤色部分を探取しプレパラートに封入後、撮影したもの。



V まとめ

今回の発掘調査により、竪穴住居跡2棟・甕棺墓1基・土壇5基・溝状遺構5条が検出された。1,600㎡という調査面積としての遺構密度は高かったものの、遺構の識別が難しいことや切り合いが複雑であることといった要因から、遺構の平面プラン・出土遺物の帰属等の面で不明確さが出てしまったことは否めない。検出された遺構は弥生時代及び中世に属するものが主であり、調査区が東西に細長いことから、調査区によって弥生時代中心のところと、中世が中心であるところがみられる。

弥生時代の竪穴住居跡の時期は、出土土器から察することができる。1号竪穴住居跡は、まとまった量の弥生土器が一括して出土した。台付きの甕や、レンズ状の甕底部から弥生時代後期と考えられる。なお、僅かに出土した中世及び近世の遺物は6号溝に伴うので、この住居跡の時代考察からは外して考える。2号竪穴住居跡も出土遺物は少ないものの同様の特徴を有する遺物が含まれ、同時期に位置付けられる。掘立柱建物も同じく、出土遺物から考えると弥生時代後期かと思われる。2号掘立柱建物は方形で大形の柱穴を有するものであり、注目に値する。1号甕棺は、丸みを帯びた底部の形状から甕棺墓衰退期の弥生終末期頃のものであろう。幾野々原遺跡から北東に位置する曲松遺跡は弥生時代後期後半から終末期の遺跡であるが、この遺跡からの出土甕棺に類似タイプがある。

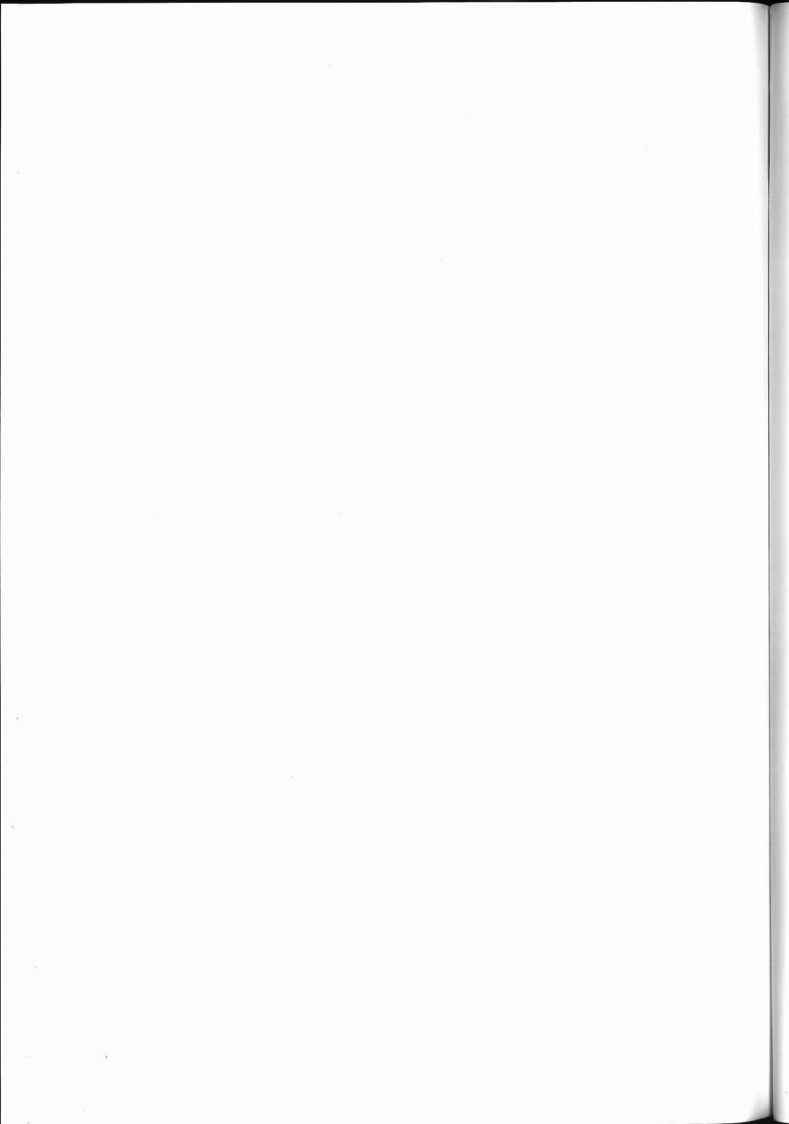
土壇については中世に属するものが多い。焼土面を有するものや土錘が多量に含まれる等の諸特徴がみられるが、遺構の性格は不明と言わざるをえない。土師皿等の形態から12～13世紀に属するものが多いと判断されるが、通例の集落では出土しない瀬戸焼や常滑焼が含まれている点は注目される。

調査区全体を見ると、Ⅰ区では甕棺を1基検出しているものの中世の遺物が大半である。Ⅱ区はⅠ区に引き続き中世の遺物が多く、ピットが複雑に密集している。Ⅲ区に近づくにつれ弥生時代の遺構・遺物が多くなり、Ⅲ区は住居跡を含め弥生時代後期の遺構・遺物が大半を占める。ただ、後世の溝等による攪乱のため、遺構を検出することが困難であった。

銅鏡が出土した遺構は切り合いによりプランが不明確である。周辺では、八女市柳瀬の茶ノ木ノ本遺跡3号甕棺から方格規矩鏡が、八女市室岡の西山ノ上遺跡21号竪穴式建物からは後漢時代の内行花文鏡が出土している。土壇から出土した当遺跡の方格規矩鏡は、完形ではないこと、さらに断面に研磨痕らしきものが見られることから、破鏡の性格を有するものであろう。矢部川の左岸流域での後漢鏡の出土は管見に触れず、弥生時代後期の重要な資料が加えられたと評価できよう。

以上のように幾野々原遺跡は丘陵の西端では弥生時代後期の集落が営まれ、中程に行くにつれ中世の遺構が展開する。丘陵を下り西側の平野には5世紀中頃から6世紀中頃までの集落である北山八竜遺跡が存在しており、丘陵上から次第に下って集落を形成していることがわかる。丘陵の北端には弥生時代終末期の甕棺があり、この遺跡との関係が深いのではないかと判断されるが、甕棺1基のみの出土であるため今後の周辺の調査を待ちたい。

写真図版





調査区Ⅰ区



調査区Ⅱ区



調査区Ⅲ区



丘陵から北を望む



1号竪穴住居跡
(北西から)



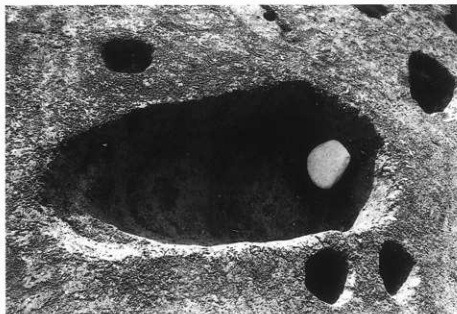
1号竪穴住居跡
遺物出土状況
(北西から)



2号竪穴住居跡
(西から)

写真 4

2号掘立柱建物
図面左上柱穴
(下が北 上から)

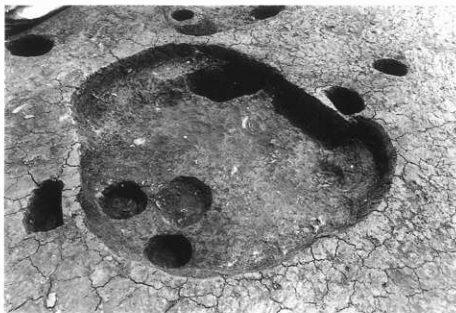


1号墓棺
(南から)



1号土壇集石
(南から)





1号土坑
(北東から)



2号土坑集石
(下が北 上から)



2号土坑
(北から)

写真 6

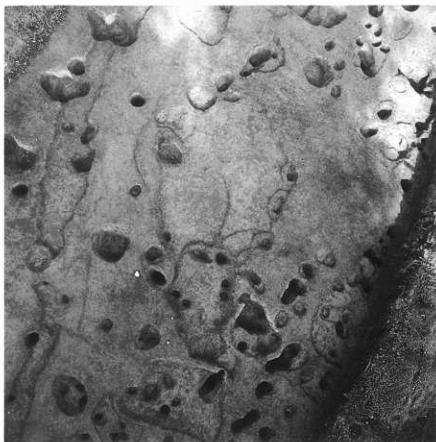


3号土坑
(北西から)

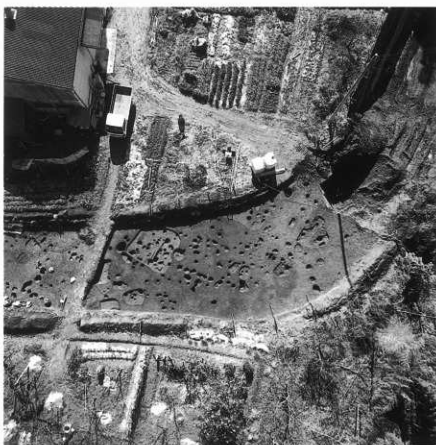


4号土坑

5号土坑



銅鏡 出土遺構



Ⅲ区東端（下が北）



1号壺棺
上壺



1号壺棺
下壺



2



12



4



13



6



14



10



15



11



17

1号竪穴住居跡出土遺物 ①



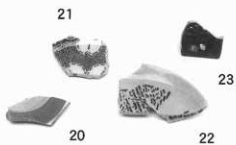
16



18



19



24



24



25



25

1号竪穴住居跡出土遺物 ②



1

2号竪穴住居跡土遺物



2

掘立柱建物土遺物



4



1

1号土坑土遺物



2



1

3号土坑出土遺物



1



4



2



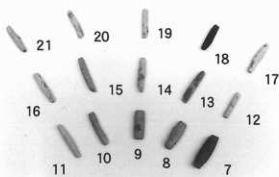
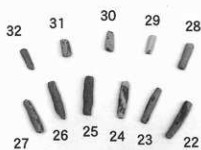
5



3



6



4号土坑出土遺物



1



5



2



6



3



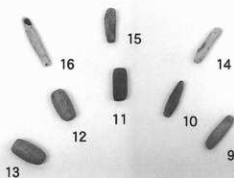
7



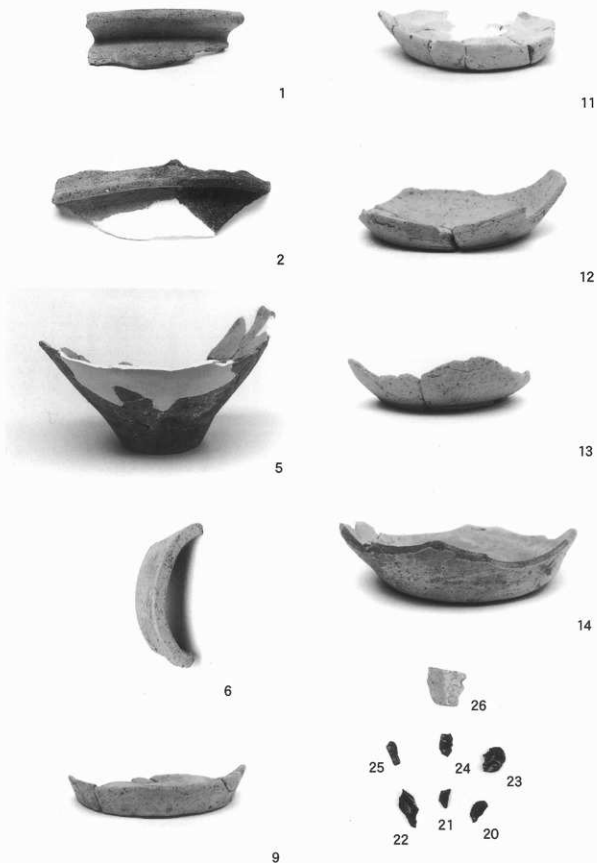
4



8



5号土坑出土遺物



I区ビット等出土遺物 ①



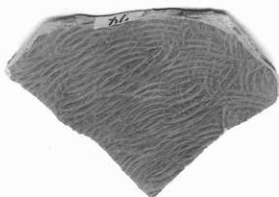
18



18



18



19



19

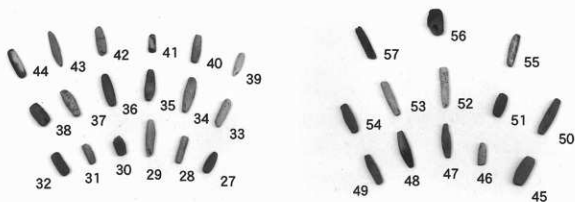


19

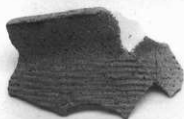


23

I区ビット等出土遺物 ②



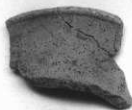
I 区ビット等出土遺物 ③



2



6



3



8

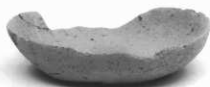


4



13

II 区ビット等出土遺物 ①



16



22



17



18



19



20



25



24

23



22

21

20



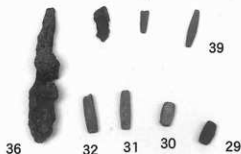
28



27

26

35 34



39

36

32

31

30

29

Ⅱ区ビット等出土遺物 ②



1



5



2



7



3



8



4



9

Ⅲ区ビット等出土遺物 ①



10



19



13



21



16



22



17



18



23

Ⅲ区ビット等出土遺物 ②



24



33



26



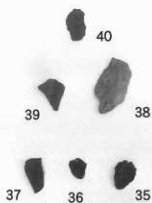
34



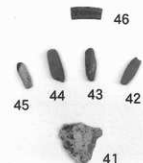
27



28



30



31

Ⅲ区ビット等出土遺物 ③



46

Ⅲ区ビット等出土遺物 ④



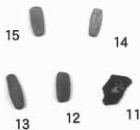
3



6



4



15

14

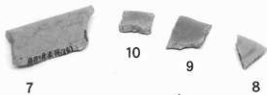
13

12

11



5



7

10

9

8

包含層等出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きののはるいせき							
書名	幾野々原遺跡							
副書名	福岡県八女郡立花町大字北山所在遺跡の調査							
巻次	1							
シリーズ名	立花町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編集者名	末継彬子							
編集機関	立花町教育委員会							
所在地	〒834-8555 福岡県八女郡立花町大字原島95-1 TEL (0943)23-5142							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード					調査面積	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	m ²	調査原因
きののはるいせき 幾野々原遺跡	ふくおかけん 福岡県 やめぐん 八女郡 たちばなまち 立花町 おれあざきたやま 大字北山 4981-1他	40543		33° 11' 25"	130° 33' 52"	平成17年 7月21日) 平成18年 1月5日	1,600	基盤整備に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
幾野々原遺跡	集落跡	弥生時代 中世	竪穴住居跡 土壇等		土師器・須恵器・ 陶器・磁器等			

野広尾横穴墓群

立花町文化財調査報告書

第12集

平成19年3月31日

発行 立花町教育委員会

福岡県八女郡立花町大字原島95-1

印刷 合資会社 東兄弟印刷所

福岡県八女市祈禱院563